
おしえて！ 女神さま。

詩月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おしえて！ 女神さま。

【Nコード】

N13420

【作者名】

詩月

【あらすじ】

いきなり召喚されて、女神の軀に憑依してしまった女子高生、星
堃雫。

中世ヨーロッパの動乱に巻き込まれ、次々にチートな相手に命を狙
われてしまうのに、神氣を使いこなす事が全然できない！

もう、どうしたらいいの？ 教えて！ 女神さま。

この世界とは何処が違う、パラレルな歴史ロマン・ファンタジー。

逆ハー展開は、本編から。プロローグは特に、シリアス、残虐度
高めです。苦手な方は回避してください。（旧題『シン・イ・キ』

御礼！
25'000アクセス超え！
～

プロローグ1（前書き）

詩月と言います。初めての投稿、初めてのファンタジーです。いろいろ拙い部分があるかと思いますが、この作品一本に専念して、完結を目指します。どうか、よろしく願います。

時代考証は最低限押さえますが、基本的にパラレル・ワールドでの出来事だと考えてください。

プロローグ1

——月齢満ちる時。

それが約束の夜だった。満月から降り注ぐ月光は無限の銀糸となり、歴史あるその小さな教会の影を、古ぼけた石畳の上に落としている。

呼吸を整えながら、両開きの重厚な飾り扉をゆつくりと押すと、年期の入った蝶番が小さく鳴いた。やけに響くその音に、彼はまだ若干あどけなさの残る端正な顔を微かに歪めるが、むろんその動作を途中で止める事はない。

身寄りのない孤児や浮浪者が、雨露と冬の寒さを一時的にでも凌ぐ仮宿として使えるように、この教会の扉は夜間でも鍵が掛けられる事はなかった。

硬い革靴の底を鳴らして教会の中に足を踏み入れると、髪と同色の彼の琥珀の瞳は、一枚の宗教絵さながらの情景に否応なく捉えられてしまう。

月灯り射し込む壮麗なステンドグラスを背景に佇む、等身大のイエスキリスト像。その足許に蹲るようにして祈りを捧げる純白のワンピースドレスに純白のベールの花嫁姿。

その様が、今にも神に召されてしまいそうな儚さで、彼は思わず娘の名前を呼んだ。

「――…アルマ」

「マテウス様！」

振り向いた娘――アルマ。クリスティンが、花が咲き綻ぶように微笑んだ。声も、そして雰囲気も、まるで砂糖菓子のように甘い。彼――マテウス。オスヴァルトはたちまちアルマの放つ匂い立つような艶めいた呪縛に絡め捕らえられてしまう。たった数歩の距離でさえもどかしげに駆け寄ると、アルマは自らマテウスの腕の中に飛び込んできた。

「お逢いしたかった！ マテウス様」

甘い言葉と態度とは裏腹に、マテウスの腕に伝わるアルマの身体には硬さが残っていた。何時ものような、極上のシルクを思わせるしなやかさはない。

戸惑うマテウスは不安混じりの声音で、再びアルマの名前を呼んだ。

「アルマ……」

「マテウス様。今宵は王都騎士団の正装でわたしを迎えに来てくださるはずだったのでは？　もしかや選抜試験の結果が芳しくなかったのですか？」

アルマが顔を上げる事はなかった。マテウスの胸元に右の頬を押しあてたままにさりげなさを装い、恋人が身に付けている物を間近で観察する。

装飾品の類は過度に目立ちすぎる事はない。布地は肌触りがよく、染色や縫製の技術は高かった。裁断のセンスや仕立ての程度もよく、王都に向かうより以前の姿に比べれば、垢抜けしているのは間違いない。

だが、それはアルマの待ち望んだ騎士の正装ではなかった。シャツにジャケットとサー・コートを併せ、膝丈のパンツにタイツのありふれた姿。

「すまない……」

消え入りそうなマテウスの言葉に、アルマの肩が小さく震えた。

「できればわたしもそうしたかったんだが、理由もなく隊から外れ

て騎士服のまま王都を離れるのは許されていないんだ。これは一般市民の帯刀を規制するためでもある。仮に許可を求めてもかなり時間がかかるらしくてね」

「！——…それでは」

「ああ、採用された。これで、わたしも王都騎士団の一員だ」

「では、御生家であるオスヴァルト商会の後を継がなくてもよろしいですね」

「いかに豪商とは言え、地方の一商人にすぎない父の圧力など王都にまでは届くまい。生活の糧も確保した。これで、おまえとの結婚を阻む障害は何もない」

くちづけ。そこでようやくマテウスにアルマの口唇が与えられた——そう、まさしく与えられたのだ。

だが、アルマの巧みな舌使いと蜜のように甘さを含んだ唾液に、脳髓の芯まで痺れさせたマテウスには、それはとるに足らない些事にしか過ぎなかった。

「その花嫁衣装は自分で用意したのかい？　もっとよく見せてくれないか」

「はい……送金して頂いた仕度金から用立ていたしました」

コクリと頷き、恥じらうアルマの爪先から頭頂部に向かい、マテウスはさつと視線を走らせる。

「とてもよく似合っている。恥ずかしがる事はない」

「似合っているでしょうか？ わたしは、マテウス様に相応しい花嫁らしくありたいのです」

ウェーブの掛かった豊かなブルネットと小柄だが肉感的でバランスのとれたアルマの柔らかな姿態を、マテウスはそつと引き寄せる。

「おまえ以外に、わたしの花嫁は考えられない。受け取ってくれかい？」

ジャケットの内ポケットから手のひらサイズの小箱を取り出して、アルマに恭しく開いて見せる。

「素敵……」

納められていた翡翠色の宝石の光沢に、小箱の中身を覗きこんだアルマの瞳が煌めく。

「気に入ってくれたようだね。おまえと同じ瞳の色だ。美しいだろう？ さあ、手を。わたしに、それを嵌めさせてくれないか」

アルマは左手を差し出し、翡翠の指輪が薬指に嵌められる様を、潤んだ瞳で瞬きもせずに見つめ続けている。

「これで我々の旅立ちは駆け落ちではなくなる。街の外れに馬が繋いである。出かけようか、わたしの花嫁。新婚旅行をかねて、このまま王都へ！」

「はい！ マテウス様」

指輪を嵌め終えたマテウスの改めて問うた求婚の言葉に、アルマは即座に答える。

幼いロジック。だがそれ故に、ロマンチズムを感じさせる言霊となり、二人を酔わせた。

手に手を取り合って、飾り扉に向かった、その時。

ポツ——と。

蒼い焰が灯った。そして一気に燃え上がる。

アルマの軀が。

「ギッ！ イッイイイイイイイイイイイイイイイイイアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ッ」

呪詛にも似た断末魔。

髪と爪、そして肉が焼け焦げ、アミノ酸から発生する硫黄が悪臭を撒き散らす。

マテウスは振り払われた腕もそのままに、立ち尽くしていた。

ただ、茫然とする以外に何の術も持たなかったのだ。

ただ、胸を吐く嘔吐感に耐えるしかなかったのだ。

『アルマは生きながらにして、地獄の業火に灼かれた』

ただ、その思考がもたらす恐怖に、マテウスは慄然とするしかなかった。

プロローグ2（前書き）

詩月です。前回に続き読んで頂いて、ありがとうございます。

今回は、残酷描写度高めなので、苦手な方は回避願います。

また、文章の地の部分に限ってですが、例えばストレス等の現代用語を多用する事になると思われますのでご了承ください。

もちろん、セリフ部分ではそうならないように気を付けますが。

それでは本編へどうぞ。楽しんで頂ければ幸いです。

プロローグ 2

神域——それは、神が操る神気の力場。

神域で展開されるは高次の定理。人には決して届かぬ領域。

定理——それは、世界の理を証明する真なる命題。

定理が刻み込まれるは、神を構成する二重の螺旋。

定理が展開され解が導かれる時、世界の理が神気となりて発動する。
――。

――崩れる、崩れていく。

何の予兆もなく、何の前兆もなく、全てが崩れ落ちていく。

マテウスにとっては、選り抜かれた存在である王国騎士団員に選抜され、望んだ相手との未来も手に入れた。何もかもが、これからの筈だった。

その全てが崩れ去っていく。

血液と体液が滴り、焼け爛れた肉は焦落ち、支えを失った内臓が腹圧により勢いよく押し出され、床に音を立ててぶちまけられる。熱で収縮した筋肉繊維が骨に絡み付き、残された体組織はやがて炭化していく。

艶よくふつくらとしていた口唇も今は見る影もなく、歯列の並びが剥き出しになっている。

左の眼球は視神経によってのみ垂れ下がり、空洞となった眼窩を晒すのみだった。

だが——それでも尚、アルマは倒れなかった。

倒れるところではない。破壊され損失し、焼滅してしまった身体の各部位が、逆モーションで再生されていく。

ありえないその光景に、マテウスは言葉を失う。

粘膜同士が触れ合い、擦れ合うような怖気を震う不快な音が幾重にも重なり、密室空間である教会の礼拝堂内部を濃密に満たしていく。

同時に、マテウスの精神も狂気に蝕まれ、崩壊寸前まで追いやられてしまう。

——狂う、狂ってしまふ。

むしろこのまま狂ってしまえばいいと、精神的な死を望む刹那の自殺願望に、マテウスが無意識下で囚われてしまった時だった。

『焰ガ効力ヌカ、ダガソレ以上ハサセンゾ、死ビトヨ』

軋んだ声がした。不確かな聞き取り辛い発音が、レシプロエンジンのアイドリングのような重厚かつ低音の唸り声に混じって——闇の中から響いてくる。

ステンドグラスから射し込む、月灯りが照らし出す中央通路。そこから外れた影の部分。

マテウスから見て左手側の長椅子の上、本来なら何もない筈の中空部分に一对の蒼い光点が浮いていた。

闇の内に潜む、さらに濃厚でいて濃密な純然たる闇——それが、地殻が断層を起こしたように三つにズレた。

蒼い光点は三対の瞳となり、爛爛とした光を放ち、分裂した闇はそれぞれ獣の姿となって音もなく中空から降り立つ。

中央通路に降りた一頭は、融けかけのバターにバターナイフを入れる程度のあつけなさで、長く鋭い爪によって床に深い掻き傷を作り、残り二頭は左右に分かれて長椅子の背凭れの上に乗る、四肢をバランスよく配置させていた。

獣たちの各関節部は瘤のように節樽立ち、骨格が醜悪に捻れている異形の姿は、シルエットだけで判断するなら大型のドーベルマンに近い。

『タマンネーゼ、コノ死肉ノ匂イ』

『アルジノ命ガ無クバ、喰ラウテヤレルノニ』

『ヤメロ。ネクロマンサーノ禁呪ヲ、解呪スルノガ先ダ。無力化シ
タウエデ、シル限リノコトヲ、ウタツテモラウ』

蒼い火の粉を口元に散らし、牙を咬み鳴らしてはいきり立って唸る二頭に構わず、中央に佇む冷静な一頭がアルマに対して刑の執行を宣告する。

「ケルベロス？ 冥界の門番が何故神気を纏っている。まさか、召喚主は神属か——」

胸から上の再生をほぼ九割方果たしたアルマが、誰に向けるともなく呟いた。アルマの軀を焼き付くさんとしていた蒼い焰は、いつの間にか四散していたようだ。

灰塵と化して大氣中に散ってしまった着衣の復元までは為される事はなく、未だグロテスクな部分を少なからず残しているが、彼女はその豊かな裸体を惜し気もなく晒している。

その妖艶さ漂う白い姿態が、ケルベロスの快楽中枢を刺激し、性欲に直結した食欲をさらに煽った。

だが、それが絶対的な好機を逸する要因となる。

本能に根差した欲求にわずかにでも反応したが故に、一瞬だが致

命的な遅滞を生じさせ、アルマが完全に再生する猶予を与えてしまったのだ。

『柔ラカソウナ肉ダゼ』

『柔ラカソウナ肉ダナ』

『アノ頸モトニ』

『アノ胸モトヲ』

『牙ヲツキ立テ』

『爪デヒキ裂キ』

『骨ゴト嚙ミ砕イテヤリテゼ』

『骨カラ肉ヲ削ギ落トシテヤル』

無限ループに発展しそうな、何時までも終わる気配の見えない遣り取りに終止符を打ったのは、やはり中央に位置する一頭だった。

『ザレゴトハ止メロ、アシガ再生シタラヤツカイダゾ』

むろん三頭は会話を交わしながらも、アルマを中心に円を描きながら廻り込んでいた。包囲の陣が完成するまであと数瞬も待たない筈だ――が。

「――遅いんだよ！」

アルマが嘲笑った。艶の戻った口唇が下弦の弧を描く。

機先を制す争いが、この場に流れる時間を一気に、そして高密度に凝縮させた。

「求め、訴えるは世界の真理。望み、導く解は 転移 の術。術式――走査！」

詠唱を終えたアルマの軀の周囲を、仄白く発光するルーン文字と数字が密集して蠢く、帯状のリングが舞った。

『惑ワサレルナ！ ヒトゴトキノ定理デ 転移 ノ解ハ得ラレン！』

コレハ——』

『ワカッテルゼ!』

『加速 ダロ!』

かつて人という種が聞いた事のない程の咆哮を上げながら、三頭は包囲の陣の完成を急ぐ。

「詰めが甘いんだよ！ 分裂して手の内晒すのが早すぎたねえ」

アルマが展開する、術式のリングの輝きが一際増したその瞬間。

教会入口の飾り扉が外部に向かって吹き飛び、アルマの姿が消えた——。

ブローグ3

奪う側と奪われる側——交わされるのは、命の遣り取り。

極限的状況下の凝縮された時間の流れの中から、定理による 加速の解を得たアルマは逸早く脱出した。

それはケルベロスによる包囲の円陣が閉じ切る寸前の、刹那の出来事。

追い詰められた者の瞬発的な集中力の高まりが、迫り来る危機を振り切った。

ケルベロスは消えたアルマに対して即座に反応、追跡を開始しようとしたが、それは叶わなかった。

アルマが残した 加速のエネルギーによる残滓が、衝撃波に変換されたからだ。

横腹に直撃を受けたケルベロスは、内臓に深刻なダメージが及ぶのを避ける為、あえて逆らう事なく衝撃波に乗って被害を最小限に抑える。

堪らないのはマテウスだった。狂気と正気の狭間に囚われ、床に手を付き膝から崩れ落ちていた彼の軀は、中央通路を嵐の夜に散った木の葉のように舞って、イエス・キリスト像の台座に背中からしたたかに打ち付けられた。

「……っ！」

圧縮された空気が肺から搾るように押し出され、声なき悲鳴を喉元から吐き尽くしたのを最後に、マテウスは意識を手放した。

衝撃波の猛威は礼拝堂の隅々にまで到達して様々な爪痕を残したが、それ以上の逃げ場を室内空間に失うと、最後は外壁に面する全ての窓硝子を破砕する。

ステンドグラスも例外ではなく粉々に砕け散り、残された窓枠からは、真円の銀月がその姿を現した。

ケルベロスの顕現化からこの間、僅か十数秒。一分にも充たない時間での出来事だった。

加速の定理で得られた解はアルマの軀を弾丸と化し、教会の重厚な飾り扉を支えるには、鉄錆による傷み具合が進行し過ぎていた蝶番を、さしたる抵抗もなく容易く弾き飛ばす。

減速する事なくそのまま後に続いたアルマの右手から、投げ掛けられた言葉があった。

「――懸かったな。そなたで最後だ、黒き吐息に触れし者よ」

不意を衝かれた、その一言。涼やかなる声がアルマの耳朵に触れた。

加速の効果が続いている最中、本来ならいかなる音も遮断され、アルマの認識外であるはずだった。超音速移動とも呼ぶべきゼロからの加速に、追いつける音などある筈もないからだ。

——唯一届くとすれば、それは。

アルマがそこまで思い至った時、二重螺旋のリングが舞った。

閉じた円環の中心に、少女が一人佇んでいる。

年の頃は十五、六。成熟前の姿態は一見華奢で薄い印象を与えもするが、腰の位置は相当に高く、胸の豊かさも年齢相応以上に程よかった。

なにより全身で描く流麗なラインは、黄金率にも匹敵する奇跡のバランスを有しており、更には静脈が透ける程に白く透明感溢れる美貌は彫像のように完成されている。

髪はまるで、今宵の月光色に染め抜かれたかのような腰にまで流れる蒼銀で、同色の瞳と共に冴えざえとした清浄なる光を放っていた。

——違う。

加速の効果がもたらすアルマの主観的世界。

超スロー再生されている時の流れの中で、唯一アルマと同じ時間軸——いや、それすら超えた次元に蒼銀の少女は存在していた。

——彼女は違う。

届く筈のない言葉をアルマに届け、蒼銀の少女は今また初めて見る定理の解法を走査しようとしている。
その姿は声と同じくやはり涼しげで、気負いや力み等は全く見られる事なく自然体だった。

——彼女の定理は、人とは違う。

目の前で展開されているのは、間違いなく神域だった

浄化促進の波動を伴う神気。
舞い踊る二重螺旋のリング。

蒼銀の色を身に纏ったその少女が、徒人^{ただひと}であり得る筈がない。

幻想種であるケルベロスを使役しているのも、だったら頷ける。
実体なき存在である霊体を受肉・召喚できるのは、極一部の例外
だけだったからだ。

——アストライア。地上に遣った最後の女神。

神域にまつわる古代伝承が、アルマの脳裏を過った。

その認識、それ自体が 呪 となり彼女の心身を瞬時に縛る。

彼女が自分のミスに気付き、臍を噛んだ時には既にに手遅れだった。

ケルベロスと対峙していた時とは一転、今度は後手を踏む事になる。

「メビウス」

究極まで省略された、短縮詠唱。

アルマの背筋にたまらなく嫌な悪寒が走った。

蒼銀の少女が求めた解は メビウス。

アルマの知識にその欠片もない言葉だった。

それも無理ならざる事。

この時代、この地上界にはまだ存在すらし得ない言葉である事を、彼女は知る由もない。

それは未知なる定理であり、未知なる解だった。

だがこの直後、アルマは神域の業を身を以て知る事となる。

ポッ——と。

蒼い焰が灯った。そして一気に燃え上がる。

アルマの軀が。

呪詛にも似た断末魔が、再びアルマの喉から迸る。

髪と爪、そして肉が焼け焦げ、アミノ酸から発生する硫黄の悪臭が、再びアルマの鼻を突く。

地獄の業火による灼熱の洗礼は、今度はしかし何時までも止む気配を見せなかった。

体細胞の蘇生——ネクロマンシー（反魂）の禁術が発動しないのだ。

自らの軀に何が起こっているのか把握できないまま、それでもアルマは永遠にも感じられる苦痛に必死で抗いながら、最後になるかもしれない解を求め、術式を走査した――。

プロローグ3（後書き）

ヒロイン登場です。

数多存在する神の中から彼女を選んだのは、「地上に残った最後の神」というフレーズが気に入ったからです。

調べてみたら作品のコンセプトにぴったりで、作者お気に入りのキャラです。

プロローグ 4

アルマは、追い詰められていた――。

既に脚部は焼け爛れ始めていて、直に使い物にならなくなる。伸ばされた爪先があと僅かで石畳に触れたとしても、その表面を蹴って敵を振り切るどころか、自らの体重すら支え切れずに、下半身から瓦解して醜悪な姿を再度晒してしまいそうだ。

ネクロマンシーの禁術を無効果された現状で、メビウスに對抗する定理の解を早急に得なければならぬ。

だが、それには問題点があった。

「術式――走査」

術式走査の並列処理は人の限界を遥かに超える。

人が「神域」に迫る唯一の可能性として、その概念自体は旧くから存在するが、実際に成功した術者は誰もいない。

何故なら望んだ解を得る前に、脳細胞が高負荷に耐えきれず、重度の高機能障害を負って廃人と化してしまうからだ――。

だからこそ“敵”は、加速中の反撃は一切ないと切り捨て、

あからさまに油断した姿を今はアルマに晒している。

メビウス 発動後、アルマの 加速 による時間軸から、まさに一撃離脱していった蒼銀の少女。

軀にフィットした深蒼を基調としたブラウスの上から、淡くグラデーションのかかった蒼色の長布を腰に巻き付けマキシ丈のプリーツスカートを形作り、残された部分は左肩から垂らして右腰辺りにペチコートで留めている。

首と両手首には細く様々な径の装飾リングが幾重にも重なり、銀色に光っていた。

加速 の世界の外に戻った蒼銀の少女の姿は、微動だにもせず隙だらけで、ひどく無防備に見えて頼りなげだ。

仕掛けるなら、このタイミング以外にない。

死人であるアルマには、負荷に対する耐久性の問題はおそらくはクリアできる。

例えば脳細胞が高速処理による排熱で灼け尽き、脳神経のネットワークがズタズタに寸断されたとしても、再生は可能だからだ。

ただしそれには、先にも記述したとおり、やはり メビウス によって無効果されている、ネクロマンシーの禁術を再起動させなければならぬ。

ここで、この難問はループする。

アルマにはしかし成算があった。

“敵”がアルマにとって逃れようのない瞬間を狙った事が逆に幸いした。常人であれば 加速 の効果が消え失せる前に躯が燃え尽きてしまうだろうが、アルマの死人であるが故の特殊性はこれを絶好の機会に変え得る事ができるのだ。

加速 という名の解の限界——その“果て”への到達。

それこそが、アルマが“一瞬”の閃きに因って得た構想の必要条件であり絶対条件。

その限定的状況下に於いてこそ、活路は拓ける。

メビウス の能力が何か特定できない現状で、ネクロマンシーの禁術にリセットを掛けるには、一般定理と禁術の組み合わせによって、“敵”の攻撃に対する一種の自己保持回路を作る以外にない。

つまり完全に無効化はできないから、“敵”の攻撃を受ける前の禁術の式に自動修復する為のバイパスを開くのだ。

体細胞の蘇生さえ再び成れば、あとは脳がオーバーロードに悲鳴を上げようが構わず攻撃用定理の術式を走査、 加速 が終わる前に“敵”に向けて発動させればいい。

問題は容量不足をどう解消するかだ。

加速　に加えあと一つの解までなら、禁術による力業の体細胞蘇生でぎりぎり凌げるかもしれないが、それでは　メビウス　の無効化に対抗し続ける為の自己保持回路を作るだけで終わってしまう。

この状況から脱出するには、更に攻撃用定理の解まで加えて計三つの解の同時運用が必要となるが、そうなれば懸かる負荷も乗数的に増す事は避けられず、最悪の場合は回路を維持する事さえ危うくなる怖れがあった。

禁術に依存した脳細胞の耐久性確保の問題と併せ、アルマの構想は複数の術式走査を同時に展開する事が前提条件となっている。

その根幹部分が成立しなければ、ただの机上の空論に終わってしまう。

彼女はその対抗策も既に捻り出していた。

「連続」を以て「同時」と為す――直列処理の術式走査を以て、疑似的並列処理と為せばいい。

脳細胞の容量及び処理能力の不足分を補う為に、　加速　によるブーストアップされた反応速度に因って得られる時間的余裕を、仮想メモリに充てるといふ発想だ。

アルマにとっての主観的時間と第三者による客観的時間に生じるタイムラグを利用し、術式走査で得られた解を、順次時間差運用する。

これなら、アルマの主観的には例えば二つの術式を連続して走査

したに過ぎない結果が、第三者の客観的視点からは二つの術式を同時に走査したようにしか見えなくなるはずだ。

それでも脳を冷却する時間が充分に確保できない為にゼロリスクとは言えないが、懸かる負荷は大幅に軽減されるのは間違いない。

禁術さえ起動できれば、必ず耐え切れる。

耐え切って、再生能力を維持していられるであろう“一瞬”の間にケリをつける。

どのみち、伸るか反るかだ。かなり分の悪い博打だが降りる訳にはいかない。

もう直に 加速 の効果も切れる。

このままアルマが何も手を打たなければ、崩れた軀を無防備に晒す事になる。

ケルベロスも再び介入してくるだろう。

逃げ延びる確率は著しく低下する事になる。

それ以前に、このままの状態が続けばいずれにしろ、確実に訪れるであろう“死”から逃れる事はできない。

為らば、回避する為に選択すべき術式は——何れであるか。

再生 ではダメだ。それでは蒼の焰を鎮火する事ができない。逆に、この煉獄に“永遠”に堕ちてしまう怖れがある。

思考はやがて一つの結論に向けて収斂していく。

迷っている時間的猶予はない。

「求め、訴えるは世界の真理、望み、導く解は 逆行 也！」

アルマは術式を走査した。

“敵”の攻撃を受ける前の状態へのバイパス——それが 逆行 の
解だった。

プロローグ4（後書き）

アルマが逃げ延びる為に、必死に考え抜くお話でした。

次話、逆転なるでしょうか。

プロローグ5

「……………何っ!？」

術式走査による定理のリングが舞う事はなかった。

アルマは 逆行 の定理が走査せず、術式が不発に終わった事を知る。

禁術に続いて、 逆行 までは無効化された。
だが、それにも拘わらず 加速 の効果は失われる事なく続いている。

アルマは混乱していた。

それでも術式失敗の原因の究明と、次なる定理選択の為の比較検討に早急に移行しようとする。

高速で錯綜していく思考を彼女は必死で立て直す。 だが、一度プリンテイングされた思考を瞬時に書き換える事は、そう容易くはなかった。

加速 の終わりは間近だったが、アルマは更に抗い続けた。
抗い続けざるを得なかった。

無駄かもしれないとの思いに怯えながら、アルマは再度 逆行 の解を求めて術式を走査する。

逆行 の定理——それは時間と空間への操作干渉型の特殊な定理。
四次元という高次からの三次元への介入。

但し、時間の流れと空間の歪みへの操作干渉及びその効力を、三次元に於けるあらゆる事象に影響力を与え、行使する事ができるのは、「神域」のみに許された業だった。

人の定理ではその影響力が及ぶのは、術式のみに限られ、術式により作用を受けた物理的現象や、肉体等の損傷に直接反映される事はない。

「神域」に比べ遥かに制約が多いのだ。

故に、単に肉体損傷部の復旧だけを主眼とするなら 再生 でも十分に代用が効いたが、蒼の焰を同時に鎮火する事ができなければ、再生 の解は効果を相殺されてその意味を成さず、良くて現状維持しか望めない。

再生 に 鎮火 、その上更に攻撃用の術式の走査となれば、加速 に併せ四つの定理の同時運用となり、アルマに於けるリソースの限界を遥かに超えてしまう。

アルマは全身を貫く激痛により、今この瞬間にも手放してしまいそうになる思考を必死で繋ぎ止め、懸命に論理を紡ぐ。

然れど、ウイルスに汚染されたソフトを初期化する様な真似はこの場合はできない。同様の術式は確かに存在するが、発動中の 加速 まで解除されしまうからだ。

いつの間にか、逆行 を選択した思考の過程を最初からトレースし直している事にアルマ自身は気付いていない。

それでも辿り着いた結論は、やはりこの状況で 逆行 より相応しい最適解など、他に導く事はできないという縋る様な思い。

やっと見つけたマツチが湿気ていて、何度擦っても火が点かない。

彼女は今やそんな一種の思考停止状態に陥り、 逆行 の術式をただ無意味に繰り返し走査するだけの存在になり果てていた。

メビウス 発動前の術式に 逆行 を以てバイパスすれば、初期化と同等以上の効果を得られ、尚且つ禁術の再起動も果たせる。

再起動さえ叶えば、デジタル音楽プレイヤーのオートリバース機能のように、再起動後の禁術を運用する事が可能なのだ。

何故なら禁術とは一度発動すれば最後、ネクロマンサー（死人使ネクロマンシー）の術式による自動制御の支配から逃れる事はできないからだ。自己保持回路とは、術式によって構成されたこの部分を含めた“フルオートの蘇生サイクル”を指す。

この状態にまで至る事ができたなら、アルマは 逆行 を解除、その分のリソースを 鎮火 に廻す余裕ができる。

故に、 逆行 から入れば、同時運用する解は三つで済む——筈だった。

一旦蘇生サイクルに入ってしまったえば、禁術の術式は人為的な阻害を受けない限り、永久に稼働を続ける。

但し、その状態を維持する為には、導かれた解自身がアルマから魔力を容赦なく汲み上げる事になる。

そこまでが蘇生サイクルの全て。
自己保持回路の一式。

脳の処理能力を軽減する代償に、魔力の消費は逆に激しさを増す。

魔力が枯渇すれば、待っているのは永遠の闇。

アルマにとっては二度目の“死”だ。

逃れる為には男を漁り続けて、その精気を魔力に変換しなければならなかった。

アルマは死して尚、娼婦にまで身を賣さなければならぬ屈辱を味わい、辛酸を舐めた。

それでも、自ら命を断つことすらできない。

望むと望まざるに関わらず――だ。

『ダツタラ、殺シテヤルゼ？』

『無駄ナ抵抗ハ止メルンダナ』

ガチガチと牙を噛み鳴らす音が、アルマの思考を寸断した。

背中に衝撃を感じ、咆哮と共に全身を石畳に叩きつけられる。頭部は左側面から勢いもそのままに落ち、頬骨が陥没した。眼球が破裂しなかったのが不思議な位だ。

殆ど間を置かず、軀の中を灼熱の棒が三本刺し貫いていく。

ケルベロスの鋭く禍々しい刃にも似た爪で、大地に縫い付けられてしまったのだと、暫くしてようやく状況を把握する。

『追い付イタゾ、死ビトヨ。モウ、逃レラレン』

三頭による巨大なプレッシャーの存在を、アルマはその大半が失われてしまった背中越しに感じた。

今はもう、彼女の軀は炭化しかけた肩胛骨から上からの部分を残すのみだ。

それでも、よく残った方だと言える。

下半身は既に塵と消え失せ、第九胸椎部から分断された状態の脊髄が、僅かなその名残だった。

——…追い付かれた。

加速の効果が切れ、唯一手にしていたアドバンテージを失った事をアルマは知った。

そして同時に、おそらくは自らが最期の時を迎えた事も——。

『アルジ、指示ヲ』

ケルベロスが発したその言葉と共に、酸の涎がアルマの鼻先に垂れて、石畳の表面を焼いた。

瞼が失われ、今は濁ってしまった瞳の焦点を、アルマはぼんやりと付けられたばかりの焦げ跡に合わせた。

その先に何か光る物があった。

アルマは失われかけている自らの視力で、辛うじてその光の正体が何かを知る。

それは、右手薬指に嵌められた指輪だった。
マテウスから贈られた翡翠色の宝石の輝きだ。

「――！！」

アルマの濁った瞳に、光が灯った。

次の瞬間、定理のリングが舞った。

「術式走査―― 風葬 よ、舞え！」

プロローグ5（後書き）

ようやくアルマの思考サイクルから抜け出す事ができました。
これで、プロローグの終わりが見えて来たようです。

軽く予告ですが、本編は「百年戦争編」からスタートとなります。
アストライアが運命の相手と出逢います。

頑張りますので、今後もよろしくお願いします。

プロローグ 6

吹き抜ける一陣の風と共に、闇色の流砂が大気に融けるように舞い散った。

アルマの軀を組み敷き動きを拘束していた二頭のケルベロスの前肢部分が、片側綺麗に消え失せている。

脚の付け根部分から更に加速しながら、頭部を始めとする他の末端部に向けて砂塵と化していく。

その断面からは風化作用によって体組織が流砂となって散逸し続け、軀のバランスを崩す暇もなく、侵食は全身に拡がり余す処なく蝕んでいる。

「コイツ！？ メビウス 喰ラッテ、解ヲ導キヤガッタゼ！」

「葬送 ノ風ダト！？ ヤバイゾ、ソイツカラ離レルンダ！」

葬送 の定理は風の他に、火、水、土、雷の解がある。

術者の属性によって得手不得手があるのだが、中でも唯一視認する事のできない風の解は、沈黙の術式と呼ばれ怖れられていた。

風を感じた時には全てが終わっているからだ。

それも触れたら最後、分子の結合解離を誘発する最凶最悪の攻撃的解だった。

他の解ならば、ケルベロスの反応速度を以てすれば走査発動後に視界に認めてからでも回避する事もできるのだが、唯一目視の利かない風ではそんな訳にもいかない。

故に戦闘中は、防御の定理を何時でも走査できる様に準備しているのが常なのだが、ケルベロスが持つ　メビウス　に対する絶対的な信頼がこの場合は裏目に出た。

悲鳴染みた獣の咆哮を上げながら、アルマから距離を取ろうとした二頭に、狂ったような哄笑が浴びせ掛けられた。

「だから、もう遅いんだよっ！」

傷んだ声帯の筋が裂けるのも厭わず、声を限りにアルマが叫ぶ。
愉悦混じりのその響きは、明らかに女性が快楽を貪っている時のそれだ。

「ざまーみるつ、あたしを足蹴にしゃがって！　くたばれつ、糞が！　道連れにしてやるから、覚悟しな！」

語彙に存在するあらん限りの陰部の俗称や性的な蔑称を、アルマはヒステリックに喚き散らし続ける。

表情筋が焼け爛れて引き付けを起こしている為に、感情が読み取りにくくなっているが、そのエモーションは狂おしい程だ。

薄汚いスラングを聞き流しながら、やや離れた場所にいた残り一頭のケルベロスは 風葬 の影響から辛うじて逃れていた。

「バカナ、アルジノ メビウス ハ絶対ダー！」

疑念も揺らぎも一切感じさせる事のない、確信を持ったその言葉の響きに応える声があった。

「その信仰その崇拜——確かに受け取った。動じず迷わず、疑わず。然れば神域に一切の揺らぎなく、道は拓き導かれん」

シャラン、と一鳴き。

蒼銀の少女が朗々と謳い上げながら腕を振るうと、手首に嵌められた銀の装飾リングがそれぞれに触れ合い、華奢な音を奏でた。

「一つ、メビウス とは——」

鈴の音にも似た可憐な声は、尚も言葉を紡ぐ。

「因果律の反転を導く定理。裏は表に、表は裏に」

舞を一差し舞うかの様な仕草。
白い右手が、螺旋を描いて天を指す。

「崩れた軀は、あるべき姿に」

蒼銀の少女がケルベロスに向けて腕を振り下ろすと、消滅寸前だった二頭の頭上に、二重螺旋のリングが舞った。
リングがケルベロスの頭頂部から下方に向けて、ゆっくりと回転しながら降りて行くと、通過した断面部からケルベロスの軀は何事もなく再生を果たしていた。

「何だ、これは？ 再生？ いや、なかった事にされてるのか。因果律の反転だって？ そんな、これじゃ道連れになんて出来ない

だろ」

我が目を疑う光景に一瞬茫然としたアルマだったが、一度籬の外れた感情は簡単に収まる筈もなく、直ぐさま表に向けて溢れ出す。

「あたし一人で、逝かせるつもりかい？ 寂しいねえ！」

アルマが再び術式走査しようとしたその瞬間、彼女の軀に燦り続けていた蒼き焰の残り火がいきなり巨大な火柱を吹き上げた。

「——！？」

メビウスにより、一時的に低下していたケルベロスの浄化の力が再び上昇曲線を描いたタイミングと、アルマの軀を中心に濃度が高まっていた一酸化炭素が、風葬が巻き起こした風の動きによって神域内に一気に流れ込んできた新鮮な酸素と結び付き、二酸化炭素との化学反応を引き起こした瞬間が重なってしまったのだ。

バックドラフト——その、水素爆発にも似た高エネルギーがアルマを蹂躪する。

風葬　の術式走査によって、ケルベロスが　浄化　への掌握力を失いかけたが故に、蒼き焰の神気が薄れ、皮肉にもこの物理的干渉を受けてしまった事実をアルマは知らない。

「終わりだ、アルマ。魔力を媒介に一時的に自縛霊化し、ゴーストに近い存在となりて自らの魂をしばらく肉体に貼り付けていたようだが、本来なればそなたの命脈は妾が　メビウス　を走査、ネクロマンサーによる　反魂　を無効化した時点で尽きている。そのまま大人しく　浄化　の焰に焼かれるがよい」

「あん……た、あたしの……名……を——」

アルマに、名前を名乗った覚えはない。
それにも関わらず、蒼銀の少女はアルマと呼んだ。

——定理も使わずに、頭ん中覗かれちゃったのか。

——いや、使われたのか？　何時の間に？

問題は何処まで（……）知られてしまったのかだが、直前の会話の内容から、全て知られてしまったと考えるのが妥当だった。

相手が戦闘の決着^{けり}を付けにきている以上、それで間違いない。

その事実^{じじつ}にアルマは、自ら敷いた敗北の最終ラインをとづくに越えていた事に、今更ながらに気付かされてしまった。

蒼い焰のフィルター^{フィルター}の向こう、揺らめく少女の姿も今はもう殆ど見えない。

——…踊らされていただけかよ、ちくしょう。

やがて、完全に視力を失い闇の底に落ちた時、アルマの意識もそこで途絶えた。

ブログ6（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。アクセス数が、執筆最大の励みになっています。

お気に入り登録してくださった方には特に感謝です。

期待に背かぬ作品になる様に頑張りますので、今後もしよろしくお願ひします。

活動報告どおり、なんとか更新できましたが、毎回執筆に時間がかってごめんなさい。ブログの作品の日付見てもらったら分かるんですけど、遅筆なんです、許してください。

ブローグ7

深夜の静寂は不意に破られた。

『A A A A A A A A A A A A A A A h R u o o o o o o o o o
o o o o o o o o o o o o o o n』

光と闇のコントラストを描く月下の街並み。その静謐に満ちた空
間の隅々にまで、その獣の遠吠えは厳かに、そしてしめやかに浸透
していく。

『R u o o o o o o o o o o h u u u u u u u u u u u u
u u u u u u u u u u u u u u n』
『R u A A A A A A A A A A h u u u u u u u u u u u u
u u u u u u u u u u u u u u n』

更に二頭の獣が追隨するかの様に夜気を震わせた。切なげに哀
しげに、絡み合い縋れ合い、共鳴し反響し、辺り一帯の建造物にあ
る全ての窓硝子を微かに鳴らすその響きは、街角から街角へと速や
かに伝わっていく。

最初は僅か数匹だった。

鼠たちの小さな影が、密集して並んでいる石造りの家屋の主に裏口付近から次々に飛び出して来ては、石畳の上を駆け出して行く。路地裏から枝道を縫う様に移動していくそれらの影は、あつという間に水嵩の増した嵐の時の川のように氾濫し、やがてメインストリートへと一気に溢れ出す。

群れを成した鼠たちは、今や道幅一杯を埋め尽くし、蠢き、ひしめき合いながら、土石流を思わせる凶暴さを獲得し、全てを飲み込む勢いで流れていく。

一見、レミングさながらに狂気に囚われた無秩序な鼠の群体がただ無闇に暴走している様にしか見えない光景だが、彼らは明らかに統制され、導かれ、追われ、そして誘^{いよせ}われている。

その本能が、畏れが、戦^{たたか}慄^{おそ}きが、今の彼らを支配し追い立てる感情の全てだった。

「AAAAAAAAAAAAAAAAAhRUooooooooooooon」

獣の遠吠えが、何処かでまた一つ上がった――。

西暦二二八四年六月二六日、ドイツの或る街で災厄が起きた。

たった一晩で、一三？人も人間が蒸発し、街中に棲息する全ての鼠がヴェーザー川で溺死した。

街の名を、人は“ハーメルン”と呼んだ。

プロローグ7（後書き）

今回、区切りのいい所で分けます。ごめんなさい。

プロローグ、一回延長で次回終了の予定です。

プロローグ 8

月は既にかなり傾きかけている。

銀色に輝く真円を背に走る二頭立ての馬車が、窓硝子の全てが割れ落ちてしまっている小さな教会の前で静かに停まった。

後にクーペという呼び名で区分される事になる、二人用の客室を備えた漆黒の有蓋馬車から、やはり全身黒一色で纏めた一人の少女が降り立った。

御者に左手を預け、エスコートされる彼女の背丈は、男が長身とはいえその腰辺りまでしかない。

狭い歩幅で小さく革靴の踵を鳴らす少女の容姿は、まだ幼女と呼んでも差し支えない程に小柄で華奢で無垢だった。

数えるのも億劫な程の白く小さなりボンが、艶やかなその黒髪を十重二十重に細かく束ね、分けられた髪は毛先に向かって緩やかなウェーブを与えられている。

ドレッドヘアにも似たその豊かなシルエットが揺れる度に、過剰とも言える全身フリルの装飾と、彼女の右腕に抱き抱えられている人形の四肢が揺れた。

人形のスケールは少女の1/1、つまり等身大で、少女と同じ黒のキャミワンピにボレロを合わせたお揃いの装いをしている。

少女はその大きさを若干持て余し気味で、教会の破壊された飾り扉の前に辿り着く頃には、人形の軀は徐々にずり落ちていき、最後は爪先を引き摺る様にして歩いていった。

「おまえは、ここで待つてなさい」

「畏まりました」

御者は入口の脇で少女の背中を見送ると、そのまま待機するかの様に退いて右の掌を胸に当て恭しく礼を執る。

血と臓物で汚れた中央通路を少女は躊躇いもなく進み、イエス〃キリスト像の前で立ち止まると、台座に背中を預けたまま意識を失っている男の額に向けて手を翳^{かざ}した。

「感じる――。この濃厚な残留思念は、さすがと言った処かしら。でもバカね、こんなに“愁い”を残すなんて。これなら 反魂 で呼び戻せるわ。わたしになら出来る。絶対に逃がさないんだから」

形の良い口唇が僅かに動き、何事か呟くと、少女の掌を中心に定理のリングが舞う。

神々に直接仕えたと伝えられている、古代超人類文明時代の失われた遺産である高速詠唱を使いこなすその姿は、黒の少女が決して外見通りの存在ではない事を示している。

「起きなさいアルマ。いつまでナザレのイエスの足許なんかで寝ているつもりなのかしら。そのまま帰依でもするつもり？」

「——余計な真似するじゃないの、お嬢さん。せつかく死ねたのにさ。主従の契約がなければ縊り殺してやれるのに」

不機嫌そうな酷く掠れた呻き声を上げながら、マテウスだった筈の男が身動きし、目の前に立つ全身黒ずくめの少女をうつすらと睨み付けた。

「償いもせずに、そう簡単に楽にはさせてあげられないわ。せつかくの大切な傀儡たちを全て失ってしまったのよ。これは間違いなくあなたのミスでしょう？」

黒の少女は左の拳を腰に当て、まだ薄い胸を反らし、小さな三角の顎を心持ち上げて、深紅の瞳を冷たく光らせる。

「“黒死”の運び屋たちが全滅かい。やっぱり情報抜かれてやがったか」

アルマと呼ばれた男は眉間に皺を寄せ、口腔内に溜まった血液を吐き捨てるとそのまま激しく咳き込んだが、黒の少女はそれに構わず追い討ちを掛けた。

「鼠はともかく人形ひとがたの方は痛いわね。禁術である 反魂 に耐えうる強靱な“器”とそれに見合う魔力持ちの“魂”の数を揃えるのがどれだけ難しい事が分かっているのかしら？ 礼装も無しに神属なんかを相手にしたりして、ほんとバカね」

「…… たまたま最初に目を付けられのがあたしだったってだけじゃないのさ。クドいんだよ……。ケルベロスだけなら逃げ切れたさ」

「裏の裏を潜くぐって鏡面文字を使い、定理を展開させられる事に気付いたのは褒めてあげるわ。並の技量でないのも認めてあげる」

「あんたが他人を褒めるなんて、…… 気味が悪い」

「メビウス にも付け入る隙があるのが分かったのだけが今回の収穫だったかしら。次はもっと上手くやるのね」

その言葉の事務的な響きに、アルマの片眉が跳ね上がった。

「あたしにもう一度あの化け物と遣り合えって言つのかい？ 冗談じゃない。今回だって紙一重に見えて、全然届いちゃいないんだ。」

ホント、相変わらず無茶苦茶言いやがる。いつか絶対殺してやるから、首を洗って待ってな」

興奮して思わず捲し立てた反動で、アルマは再度激しい発作に襲われ咳き込んだ。

「そう、楽しみにしてるわ」

黒の少女は苦しむ下僕の姿を、冷えた視線で見下しながら、小さく鼻で笑う。

「さあ、器を替えるわよ。その男の面は割れてしまったからもう使えないわ。ここで棄てるのね」

アルマの表情に僅かに翳が射した。

「マテウス……。王都への、せつかくの足掛かりだったのに。残念だよ……。ホントに……。さ」

自分自身の両肩を抱き締め、何かに耐えるような仕草。乱れた前髪と俯き加減顔の顔に隠れてよく見えないが、目尻には確かに光る物があった。

「あなたって素直じゃないのね。可愛くないわよ」

「……うっさいんだよ、バカ。ほっとけ」

溜息を吐いた黒の少女の呆れた様子に、アルマは頬を紅く染める。

「そんな事はいいからっ。早くあたしの軀の代わりになる“義殻”を出しな。用意してあるんだろ？ 確かに、この軀は魔力の器としては物足りないから、わざわざ 再生 させるまでもないけど、このままだと全身打撲と内臓破裂で身動き一つ取るのも辛いからたまんないよ」

「あら、“義殻”なら最初からあなたの目の前にあるじゃない。急な事で準備が間に合わなかったから、あなたには“とびつきり”を用意してあげたわ。どう？ わたしの“義殻”よ、ありがたく受け取りなさい」

目の前に差し出された人形に、アルマの思考が硬直した。

「——ちょっと待て」

「今日からアルマ・クリスティンは、このわたし、ラウラ・ヴァーリア・ヴィッテルスバッハの双子の妹になるのよ。傍流とはいえ、王家の血筋を汲む名門の一員だわ。光栄に思いなさい」

「待てって言ってるだろ。可愛いだけじゃダメなんだよ。そんな貧相な“義殻”じゃ、男も誘惑できやしな——！！」

気付いた時には遅かった。アルマは、自分がパンドラの函を開けてしまったのを知った。

言い知れぬ冷気に、ケルベロス相手にさえ対等以上に渡り合った彼女が思わず身震いする。

「……もう二度とそんな舐めた態度が取れない様に厳しく躰けてあげるから、覚悟なさい」

ニッコリと“極上”の笑みを浮かべ黒の少女が告げた殺気混じり

の言葉は、アルマにとって死刑の宣告よりも酷薄な響きを以てその身に迫り、彼女はただ声にならない悲鳴を上げるしかなかった。

プロローグ8（後書き）

今回でプロローグは終了です。ここまでお付き合い頂きまして、ありがとうございます。

ヴィッテルスバッハ姉妹には、百合を担当してもらう予定です。作者の百合SSをご存知の方には納得の展開かと。好きなんです、百合が。

次回からいよいよ本編スタートです。予告どおり逆ハー要素入ります。

それから、これはまだ悩んでるんですが、たぶんトリップ要素もご推察のとおり、逆ハーもトリップも大好きです。

頑張って書きますので、今後もよろしく願います。
評価・コメント頂ければ、作者が泣いて喜びます。

1-1 壊れたメビウス

『誰か、応えよ！！ アストライアの名の許に求める！！ メビウスが——メビウスが壊れてしまう前に！！ 早く！！』

悲痛な叫び声。

目を開ければ、そこは闇。辺り一面の闇だった。唯一漆黒を四角に穿つ眩い光が、急速に遠ざかっていくのが見えた。

幼い頃に乗ったフリーフォールによく似た感覚が、重力に引かれ、落下している最中である事を教えてくれる。

恐怖に軀中の血液が逆流し、咽喉から悲鳴が迸る。

衝撃。重力からの解放。同時に、上下左右の感覚を失った。三半規管が狂っている。

四肢に抵抗を覚え、必死にもがく。

直ぐに呼吸が苦しくなり酸素を求めた。あっという間に、口の中に水が流れ込んでくる。

そこでようやく水の中に落ちたのだと気付く。

朦朧とする意識。耳許に獣の唸り声。水中なのに、何故かハツキリと聞こえた。

両腕と項に噛み付かれる。痛みは感じない。

一方向に加速、水の抵抗。
かなり強引に、陸地に引き揚げられる。

全身から力が抜けている。

肺が上手く機能しない。酸素が足りなくなっていく。体温の低下。
寒い、寒くて凍えそうだ。

チアノーゼの症状。

残された時間は少ない。

間近に、死の気配。

威嚇。また、獣の唸り声。

誰か、人の気配。お互いに距離を測っている。それが分かる。

暫くの間を置いて、そっと抱きかかえられると、外套が何かに冷えた軀を包まれる。

いつの間にか、唸り声は止んでいた。

口唇にぬくもり。

人工呼吸だ。なのに何処か甘い。

この状況で冷静さを残している事に、心の裡で嗤う。
直ぐに気道が通り、水を吐く。肺が酸素を求め、喘ぐ。咳と涙が

止まらない。それでも貪るように喘ぎ続ける。

どれだけ時間が経ったのかは分からない。やがて落ち着き、ぼんやりと見上げる。

そこには見慣れた端正な顔立ち。

でも、何処か違和感。

髪と瞳の色が、知っているそれとは違う事に気付く。

——アッシュグレイの髪に、普段のわたしと同じコバルトブルーの瞳。

——ちょっと待って。わたしと同じって、何？ コバルトブルーの瞳？

「もう、大丈夫だ。わたしの言葉が分かるな？ 自分の名を言えるか？」

目を閉じれば、それはいつもの聞き慣れた声の響き。

——ダメだよ、兄さん。妹相手にするには、さっきの口づけは甘過ぎる。

——この気持ち、とっくに知ってる癖に。ずっと前から気付いて

る癖に。

——だからお願い、優しくしないで。想いが、止まらなくなってしまう。

抑え付けた想いが、溢れ出す感情が、千々に乱れる。
それが相手にも伝わった。

「まだ意識がハッキリしないのか。名前だ、分かるか？ 名前を言え。記憶を失った訳ではあるまい。それとも名乗れぬ理由でもあるのか？ まさか不法入国者ではなからうな」

ざわめき。金属同士の擦れる音。
目をそつと開けて首を巡らせると、甲冑に身を包んだ男たちに囲まれ、剣先を一齐に向けられていた。

「頭でも打っているのか？ 何処か痛むか？」

気遣わしげに、コバルトブルーの瞳が揺れている。
額や頬、肌に貼り付いている濡れた髪をそつと梳く手付きに、限

りない慰撫を感じた。

心から心配してくれているのだと、分かった。
拒む理由は見当たらない。

咽喉がヒュ——と鳴った。酷い掠れ声。搾り出す様に言った。

「わたしの、名前は……」

1 - 1 壊れたメビウス（後書き）

本編開始です。どうか、よろしくお付き合いください。

最後まで、アストライアが記憶喪失になる案と迷ったのですが、結局トリップ案になりました。

どちらにしろ、アストライアが最強すぎるとストーリーが進まないで、この形を選択した訳です。

楽しんで頂ければ幸いです。

1 - 2 壊れたメビウス

ほしのしずく
——星埜雫。

確かに雫はそう答えたはずだった。初対面の相手に名乗る時、何時もちよつとだけ照れが入るけど、自分ではかなり気に入っている名前。

星埜灯でもなく、星埜光でもなく——雫。

その言葉の響きが、その言葉のイメージが、彼女はとても好きだった。

自己紹介の時に茶化したりせずに、名前を褒めてくれる相手には無条件で好感を抱いてしまう程だ。

殆んどのは相手は、どの漢字を宛てるのかも含めて、必ず何らかの反応を返してくれた。

「……………」

だから、目の前の相手と無言で見つめ合う状況になって雫は少し慌てた。

それも兄そっくりとはいえ、髪の色とか瞳の色とか、そして透明感のある肌とか、美形度がいろいろと反則的に増している。

雫は軽い目眩を覚えながら、今更ながらに気付く。

—— あっ、外人さんだよな。 発音？ 発音が問題なの？

—— どうしよう、名字から名乗っちゃった。 もう一度？

言葉が何故通じるのかとか、それ以前にこの場所が何処なのかとか、更に言うなら突然に湖らしき水中で溺れかける状況に陥った不可解さとか、雫が気にすべき点は即座に幾つも列記できるのだが、今現在の彼女にとって優先すべき事項はあくまで自己紹介だった。

—— だって知らない相手だし、自己紹介しないと始まらないしっ。

それは、逃避規制という名の無意識下の防衛機能。 PTSDから逃れる為に、問題点を先送りしているだけの態度でしかない。だが、それでも前向きの姿勢である事には間違いなかったが。

雫は血色を失ったままにいる紫色の口唇に、必死に微笑を浮かべると、場が何故か再びざわついた。

——そつ、そんなに顔色悪いかな？

疑問に感じて周囲に視線を走らせると、目と目が合った美形揃いの騎士たちの顔が順を追って何故か一瞬で強張っていく。

なかには後退りする者まで数名いた。

理由も分からず、思わず手に触れた襟元に縋る様にして見上げると、直ぐ間近にあるコバルトブルーの瞳が揺らめき、その涼しげな目許に朱が走った。

——あ、兄さんと違ってちよつと可愛い……かも。

雫は動揺の原因を問いかけようとして、呼びかけるべき相手の名前を未だ持たない事に気付く。

「えつと名前、教えてもらえませんか？ わたしは雫。シズク・ホシノです」

今度の反応は顕著だった。瞠目と共に息を呑む気配、それに続く茫然自失の表情。

「やはり、オリンポス一柱が御名……」

「——あの？」

意味不明の呟きに、雫は曖昧な態度で微妙な反応を返す。

「これは失礼、アストライア様。あまりに貴き御名に、暫し我を失っておりました。申し遅れましたが、わたしはワラキア公国よりブラン城を預かるトランシルヴァニア領主レオン・レフ・トランシルヴァニア公爵と申します。以後、お見知りおきください」

よく響くバリトンの声に乗せられたその言葉が、契機だった。

意外にも爵位と土地の統治者である事を告げられ、驚きに身を固くした雫を余所に、騎士たちが踵を鳴らして一糸乱れず姿勢を正す。近衛騎士団第一三隊総勢五？名。

その最前列中央。白い甲冑に同色のマント、藍色を含んだ黒の短髪で頬に傷ある野性的な雰囲気纏う精悍な男が、しなやかな動きで一歩前に進んだ。

「アストライア様に捧げっ！」

号令一下、騎士全員が立剣を両手に捧げ持ち、剣の切尖を天に向け、高く掲げた。

一部の狂いもない精錬度の高いそれらの所作は、騎士たちが生粋の精鋭である事を窺わせる。

次に彼らが執った行動に、雫は心底驚く事になった。

両の手首を中心に剣を一八？度回転させると、流れる様な滑らかな動きで剣を鞘に納め、その場にいる騎士全員が躊躇う事なく一斉に跪いて、臣下の礼を執ったのだ。

壮観なその光景。雫を中心に少し離れて事の推移を注意深く伺っていた、三頭のドーベルマンにも似た狩猟犬たちが、満足げに咽喉を震わせ、虚空に吸い込まれていきそうな咆哮を次々に上げた。

「待つて！ ちょっと待つてください。雫です、シ・ズ・ク。皆さん、きつと誰かと間違ってます！」

何故だが、自分の名前が他人の名前に勝手に変換されてしまう事に、言い様の無い不安を募らせ、雫は否定の言葉を必死に紡ぐ。

「これだけの神気を他の誰かと見誤るなどとその様な不敬、他国ならともかく、未だ伝説が色濃く息衝く我が領内では決して起こり得ぬ事。ご心配なさいますな。全てわたしにお任せください」

トランシルヴァニア公爵は雫を軽々と抱きかかえたまま立ち上がると、騎士たちに向き直り厳かに口を開いた。

「これより帰城する！」

叩頭する騎士たちの姿を眼下に、雫は再び軽い目眩に襲われる。体温低下による貧血だけが原因ではないと思われるその目眩が、今度は簡単には治まりそうもなくて、雫は自分が抱いた歓迎せざる心の裡なる予感に、小さく身を震わせた。

1 - 3 壊れたメビウス

空は一面、灰色の厚い雲に覆われている。

陽の光が届かない群青に沈んだ水面を針葉樹がぐるりと取り囲んだ、その湖畔。

雫を縦抱きにかかえ上げた公爵が水際から離れると、二人を中心に半円を描いていた白のフルメタル・アーマーの壁が左右に割れた。

僅かな揺れを感じ、公爵の首に手を回してしがみついた雫は、彼が甲冑姿でない事に今に至ってようやく気が付いた。

黒のソフトレザー・アーマーのタイトな上下繋ぎのスーツに、今は雫の軀を包んでいる銀のマントの組み合わせが、彼自身の持つ色に映えよく似合っている。

胸元は衿が立てられ、ラフに開けられていた。

端正な容姿と品のある丁寧な物腰の割にラフな印象だが、それでも洗練された雰囲気は些かも損なわれず、粗野な感じに堕ちてはいない。

——見た目どおりの大人しい性格ではないんだろうな。

何となくだが、雫の勘がそう告げていた。彼女の勘は割と高い確率で当たる為、下手な占いよりも信頼を寄せる友人も多かった。

「馬を引け！ アストライア様を城にお招きする。早馬を駆けさせろ！ 侍女長に星霜の間をすぐに使えるよう指示を与えておけ！」

「ははっ！」

間髪置かず首肯して背を向けた騎士数名を、公爵がすぐさま呼び止める。

「ああ、待て。宰相に伝令だ。我が国境の結界に揺らぎ無し——と。後は追って、詳細を伝える」

「——御意」

雫が余計な事を考えて言葉を挟むタイミングを逃し続けているうちに、事態は刻々と進行していく。

遠ざかる複数の蹄の音に気を取られていると、直ぐ間近で馬の嘶き（いななき）が響いた。

ビクリと身を震わせ、反射的に顔を向けると、白と黒の二頭の馬が雫を見下ろしていた。

しなやかな筋肉に躍動感を漲らせて荒ぶる黒い馬と、静けさを湛えながらも強い存在感を放つ白い馬。

——きつれーい。人も馬も綺麗すぎるよ、もう。

その雄々しさに、その優美さに、雫の視線は思わず釘付けになった。

「さ……貴き御方、御手を預けて頂けますか」

「あ、あの。貴き御方なんかじゃないんです、ホントに。女子高生なんです、わたし」

馬の姿に夢中になっていた雫に、そつと差し伸べられた手。呼びかけに答えながらその先を視線で辿ると、藍色を含んだ黒髪に頬傷の精悍な顔がそこにあった。

眼光鋭く、野性的な雰囲気漂わせる、男臭いタイプ。

後に続く言葉はそれきり何も無く、沈黙がやけに似合っていた。それが、普段から彼が寡黙である事を窺わせる。

——何、この迫力？ 怖いしつ。

相手は片膝を付いていて、雫が見下ろす態勢であるにも関わらず、彼が放つ無言の圧力は肌で感じる程だった。

それでも頬傷が無ければ、かなり印象が違うのかもしれない。

雫は好意的にそう感じてはいたが、元来人見知りの彼女にとって、差し出された手を躊躇いもなくいきなり取るにはハードルの高い相手と言えた。

女子高生の日常風景では、絶対に遭遇しないタイプであるのは間違いない。

学校、コンビニ、ファーストフード、ファミレス、ショップ、ストリート。

思い付く限りの場面。その何れでもなく、テレビのニュースでかつて見た、遠い外国の戦場に佇んでいる姿の方がまだ自然に想像できてしまう。

視線を外すタイミングを失い、見つめ合っているうちに沈黙に耐え切れなくなつた雫の目尻に小さく涙が浮かび、見る間に溜まってい

いく。

騎士たちの間で息を飲む気配が拡がり、動揺が走った。

頬傷の騎士も反応を同じくして、身動き一つ取れないでいる。

「――！」

やがて雫の瞳から涙が一条零れ落ちた時、固唾を飲んで雫の様子を伺っていた騎士たちが、声にならない悲鳴を一齐に上げた。

或いは、主君を前にしていなければ、女性を泣かせるという騎士道精神にも悖る類傷の騎士の行いに、非難と怒号の嵐が飛び交う事になったかもしれない。

ましてや、相手は神気をその身に纏う女神なのだ、不敬の謗りは免れなかった。

泣いてしまった事が気恥ずかしくて、泣き顔を見られてしまった事が居た堪れなくて――。

雫は咄嗟に騎士たちから目を背けると、公爵の胸元にそのまま顔を埋めた。

「迷子になった子供の様な顔をしているぞ、イシュトバーン。死に装束の色を纏う戦場の白い亡霊と、他国から怖れられた近衛一三隊隊長も形なしだな」

「陛下――…真に、畏れ多く」

溜息混じりながら、若干からかいを含んだ公爵の言葉に、沈んだトーンで答える類傷の騎士の声。

そこに、さっきまでの張りのある響きが失われている事に気付いた雫は、激しい罪悪感に襲われたが、今この場で振り向く勇気をどうしても持つ事ができない。

——ごめんなさいっ、イシュトバーンさん。少しだけっ、少しだけ時間をください。

美形である事が逆に仇となり、意図せず生まれ持った野生に凄みが増してしまうのは、決してイシュトバーンのせいではない。

だがそれでは、草食系男子に慣れ切っている、都会育ちの現代っ子である雫に、恐怖心と威圧感を与えてしまうのも、また仕方ない事だった。

忠誠の騎士であるイシュトバーン苦悩の日々は、今この瞬間から始まった。

結局、雫が落ち着きを取り戻し馬上の人となるまでには、暫しの時を要する事となった。

1 - 3 壊れたメビウス（後書き）

拙作にアクセスして読んでくださってる方、お気に入り登録してくださってる方、どちらも本当にありがとうございます。
執筆の励みになっています。

今後も、よろしくお願いします。

1 - 4 壊れたメビウス

『危ない、雫！ そのパはやめろ！ アッサンブレするな！』

誰かが呼んだような気がした。見上げれば、闇を四角のフレームでくり抜いたかのような光が射し込んで来ているのが見えた。

あの光の向こう、闇の彼方に、雫は大切な物を全て置いてきてしまった。

学校やストリートのトモダチ。

先月の誕生日に、機種変したばかりのケータイ。

お気に入りのアクセや洋服。

まだ一度しか履いてないミュール。

試供品ばかりだけど、苦勞して揃えた高級ブランドの化粧品ワンセット。

売り切れ続出だったファッション雑誌の付録でゲットした、有名デザイナーがプロデュースしたトートバッグ。

続きが気になる、読みかけのシリーズ物のコミック最新刊。

そしてもちろん、何よりも大切な家族。

脈絡も無くアトランダムに記憶がフラッシュバックする。
明滅する映像のカットバック。

それら全てが、遠去かっっていく。

かけがえのない日常を置き去りにして、雫は“こちら側”に来てしまった。

——戻らなきゃ。皆に、兄さんに心配かけちゃう。

そう思うのに、軀は何故かフリーズしたまま動かない。
焦ってもどうにもならず、気持ちばかりが先走る。

触れてはならない何か、あの光の向こうにある。
思い出したくない記憶が、あの闇の彼方にはある。

帰りたい、帰れない。
戻りたい、戻れない。

触れてはならない何かに触れて、思い出したくもない記憶を取り戻してしまったなら。

——きっと、わたしは壊れてしまう。

不意に何処かで、獣の遠吠えがした。

哀惜と愛惜、そして哀切。誰かを偲ぶ様な、それでいて慈愛に塗れた響きが三つ、絡み合う。

レクイエム
鎮魂歌の響きを持った、ララバイ子守歌——そう聴こえた。

——そんなに心配そうな声を出さないで、アストライア（わたしは大丈夫だから。ケルベロス（おまえたち）の反応を見れば分かる。この人たちは信用してもいいんだよね。

白い装甲をその身に纏う、フルメタル・アーマー姿の騎士たち。

短く揃えられた藍色を含んだ黒髪に、黒い瞳が鋭い頬傷の騎士。

アッシュグレイの髪に、コバルトブルーの瞳が揺らめく公爵様。

——お願い。暫くは、この腕の中にいさせて。

——だってここは、こんなにも居心地がいい。

心地よい揺り籠の中。できるなら何時までもこのまま微睡んでいたいと、雫は心よりそう願った。

「守ってくれるよね？ お兄ちゃん（…………）」

ほんの一瞬の間。気付けば息が止まる程に強く、背中が反り返るくらいにきつく、限らない優しさで軀を抱き締められていた。

「――」

額にそつと置かれた掌の、その冷たさが気持ち良かった。名前を呼ぶ柔らかな声音が耳朶に触れるのが攪ったかった。

その名前が確かに自分に向けて呼び掛けられた物であるなら、例えそれが自分自身の名前で無く、アストライアの名前であろうと、今はもうどちらでも構わなかった。

そう感じる自分に、雫は疑問すら覚えない。

——アストライアはわたしで、わたしはアストライアなのだから。

二人に区別なんて、ない。

雫とトランシルヴァニア公率いる近衛二三隊の騎士たちの姿が、針葉樹が林立する西の国境付近の湖畔から消えて数刻後。

群青に沈んだ湖面が漆黒の闇に溶ける頃、厚く空を覆っていた雲の切れ間から下弦の三日月がその姿を覗かせた。

風もないのに湖面がさざめき、小さく細かな波が反射する光の粒子が揺らめきながら、磁極に集まる砂鉄の様に一箇所に集約していく。

濃密さを増した光の粒子はやがて人の形を象り始め、そのイメージを明確にしていた。

現れたのは、色素を持たないアルビノの女性体。

ベリーシヨートの髪から爪先まで全身が白く、メラニンの保護を持たない瞳だけが、血液の色もそのままに真紅に染まっていた。

長身でスレンダーな肢体の要所を金色のビキニ・アーマーと部分装甲で固め、薄刃の両手剣を皮のホルダーに納め、背に負っている。

「ウロボロスの円環」

そう言い終えるや否や、抜刀一閃。

軀を三六〇度回転させると、白の少女は剣の切尖を足許に深く突き刺した。

両手で柄を握り締めたままゆつくりと空中を浮上し始めると、剣先が描いた軌道そのままに湖面が円形に切断され、湖水が円柱状となつてせり上がってくる。

片手で軽々と大剣を取り回し、切尖を天に向けて掲げると、湖水は円柱の形状を保ったまま刀身の動きに合わせ付いてきた。

その長さは、周囲に生える針葉樹の高さにも迫る程だ。

「間違いない。見つけた、アストライアの神気。月の光から、逃げ切れと思ったかい？」

口角の持ち上がった、薄く血の気の無い口唇。
酷薄な微笑を湛え、白の少女は言葉を続ける。
その口調は何処か少年のようで、中性的だった。

「ウロボロスの円環とメビウスの定理。導く解が違つとは
言え、同一概念上の力は二つもいらない。

でも今回は見逃してあげるよ、アストライア。ウロボロスの
存在を知らなかったキミと、メビウスの存在を知っていたボク。
条件が対等でなければ戦いは美しくないからね。とりあえず暫くは、

ボクの邪魔をしないで大人しくしてくれればそれでいい」

血を払うかのような仕草で剣を一つ振るうと、円柱状の湖水は再び元の液体に戻って、音を立てて湖面に降り注いだ。

「次に会う時を楽しみにしてるよ」

その言葉を最後に、白の少女は光の粒子となって月光に溶け込み、凪いだ湖面へと静かに消えた。

1 - 4 壊れたメビウス（後書き）

アストライアの宿敵登場です。

勘のいい方なら、その正体に気付かれるでしょう。

毎回、読んでくださっている方、ありがとうございます。

お気に入り登録までしてくださった方にはもう、感謝の気持ちでいっぱいです。

今後も本作をよろしくお願いします。

2・1ブラン城星霜の間

額に置かれた掌が離れていくと、トランシルヴァニア公に横抱きにされ、それまで心地よく感じていた馬上の揺れが、激しい振動へと変化した。

馬の駆ける速度が上がったのだと、雫は気付く。それと共に頭の芯が疼く程に痛んだ。軀に熱が籠もっているせいだと彼女はぼんやり思う。

背筋に悪寒が走り、思わず身震いする。冷気が容赦なく肌を刺す。

「陛下！？ 如何されました？」

「アストライア様が発熱なさっている。弱った御身に負担をおかけする事になるがやむを得ん。この斜面を上げれば城まで僅かだ。先を急ぐぞ。後に続け！」

公爵とイシュトバーンが交わす言葉が、やけに遠く聴こえた。

瞼をそつと開けると、辺りは既に薄暗く、宵闇が迫っているのが分かる。

この土地は今の時期、陽が落ちると気温が急激に下がるようだった。

日本ではもう夏真っ盛りだったのに、寒くて凍えそうだ。

——だから言ったじゃない。アストライア？　女神様が熱を出すなんてありえないし。

雫が熱く細い溜息をゆるると吐きながら、公爵の端正な顔を見上げると、雲間から姿を覗かせた月が煌々（こうこう）と、一行の後をずっと追ってきているのが見えた。

『月が紅く見える時は凶事が起こるんだよ——』

何故だか不意に浮かんだ、遠い昔の記憶。

地上を照らす三日月がやけに紅く禍々しくて、母の田舎に一人で暮らしていた祖母が、幼い頃によく話してくれた迷信を思い出す。

軀の震えが止まらないのは、寒さのせいだけではないかもしれない。いい。

雫の予感に望むと望まざるに関わらず、どんな時にでもよく当たる。

「ですが馬を速駆けさせては、今は姿を消しているあの三頭は、我々を見失わずに後を付いて来れるでしょうか？　畏れながら、殿しんがりの一頭を残していくべきでは——」

「構わん！　真実伝承が事実なら、馬ごときで振り切る事などでき

るはずもない。何時如何なる時も、使い魔は主の身近に共にある筈だ。城の守りなど苦もなく突破してくるだろう。また、そうではなくてはな。それこそ、アストライア様がアストライア様であられる何よりの証だ。

これを機に、五月蠅く騒ぎ出すハエ共がどれだけいるか楽しみだ」

右側面を白い馬で併走するイシュトバーンの問いにそう答えると、公爵は馬に鞭を一度くれ、さらに速度を上げさせた。

「おまえたちこそ、我が“黒竜”の俊脚から遅れるな！」

声を張り上げ、公爵が再度馬に鞭を入れると、それを合図に後続の騎士達も一斉に鞭を振り上げた。

馬群の速度は一気に上がり、山間の針葉樹林の間を走る街道にしては整備されている路面を、まるで縫うようにして突き進んで行く。

雫は右肩を公爵の胸に預け、振り落とされないよう控えめにそつとしがみついた。大きな掌で掴まれた華奢な左肩が、軀を包むマント越しにも関わらずやけに熱く感じてしまう。

どうやら熱は上がっていくばかりのようだ、雫は朱に染まった頬に当たる風の冷たさを感じながらそう思った。

潇洒な雰囲気で纏められたその室内空間は、今や戦場にも似た喧騒で満ち溢れていた。

慌ただしく動き回る、黒の制服に白いフリル付きのエプロンを合わせた侍女たち数人に、窓際に置かれたソファ―に座りながら次々に指示を飛ばす、緋色の長い巻き髪に同色の瞳を持った妙齡の女性が一人そこにいた。

目許のほくろが一際魅力的な彼女は、愛玩用の高級猫を連想させる美貌に、気怠げで退廃的な雰囲気をその身に纏っている。

だが、その外見的な印象とは裏腹に、彼女は左手に持った飾り扇子で部屋の調度品類を順を追って指し示し、淀みなく差配していく。

「壁に掛けられた絵画類は全て外すのじゃ。ああ、そんな一人でも裏を確認できそうな小さな号数の物はよいである。――いや、待て。これ見よがしの罫も“撒き餌”として必要かの？ まあ、よい。そのまま続けよ。特に影響がないと思われ、簡単に見つかりそうな場所には、これより以降は隠蔽工作は要らぬ。

後はそうじゃな、クローゼットや棚の引き出しの裏、ティーカッブにソーサーの裏、応接セットの下に敷かれたラグの裏。

ええい、妾の指示を待たずとも、仕込める処には手当たり次第に仕込んでおくがよい。

そうそう、寝台の周辺も忘れぬようにな。それから、各扉に窓、侵入経路は必ず抑えておけ」

ソファアの肘掛けに右肘を付き、手の甲に軽く頬杖を付いたその表情は何処か憂いに満ちているが、彼女の美しさは些かも損なわれてはいない。

肉感的な弾力ある軀を、マキシタイプの深紅のドレスに無理矢理押し込めながらも、蠱惑的なその魅力を零れんばかりに発散させ続けている。

そのとめどないフェロモンは、例え相手が枯れた老人であろうと屈服させ、跪かせてしまうに違いない。

「——姫様。おいでになられたようです」

窓際にいた、長身にスレンダーな体型の、黒髪を顎のラインで切り揃えた侍女が振り返って言った。

緋の姫君は、扇子を開いて口許を隠すと目を細めて頷く。

「分かっておる。城内に入る前から神気がこのように離れた場所にもまで漏れ伝わってくるとは、何とも迂闊な。これでは一介の民草にも容易に気取^{けと}られてしまうのう。厄介な客人を招き入れてくれるものじゃ。」

“神属を地に這わす事のできるのは神属のみ”

最後まで匿^{かくま}い切るなど、到底無理な話である。神殺しの礼装でもあれば、退ける事も出来るであろうが」

「畏れながら、少々不用意にすぎるのではないかと。正式には未だこの城は御老公様、ひいては姫様の所有物であると言うのに。ツエペシユ一族の不興を買えばワラキア軍が何時でも動く事を、きちんと理解されているのか甚だ疑問です」

「坊やだからねえ、可愛らしいじゃないか。だが、それでよい。それでこそ愉しめるというもの。グラスの中のワインの液面に、さてどんな波が立つであろうな？」

「姫様は人に甘過ぎます。逆賊相手の御婚約など、破棄されてしまえば宜しいものを。気が早くも、あの者が陛下と呼ばれているのを聞きたび忌々しく感じます。何も無血で城を明け渡さずとも、我らは血の一滴から肉の一片に至るまで、全てをツエペシユの御一族様方に捧げるつもりでありましたのに」

「人の身である者の方が財を成すのが上手だからのう、この辺境の地で何処まで出来るか、暫くは間近でじっくりと見させてもらえばよいである。せいぜい贅沢をさせて貰おうではないか」

長身スレンダーの侍女が悲痛な心情を吐露した言葉を、特に咎める様子も見せずに、緋の姫君は目を一層細めて答える。

その気配は、飼い慣らされた高級猫のものではない。

もしも彼女に“牙”があつたなら、今は扇子で隠されている紅く濡れた口唇の両端から“それ”を剥き出しにしながら、獰猛な笑みを浮かべているに違いなかった。

2・1プラン城星霜の間（後書き）

今回もまた、お読み頂いてありがとうございます。

お気に入り登録も少しずつ増えてきて、嬉しく思っています。
重ねてお礼を申し上げます。

雫の全く知らないうちに、様々なフラグがあちこちで立てられています。

頑張れ、雫w

2・2ブラン城星霜の間

不意に黒く連なっていた影が途切れると、再び月灯りに照らされた。

公爵の肩越しに後ろを覗けば、針葉樹林が見る間に遠ざかっていく。

一行が馬に鞭を入れる回数が減り、ゆっくりと速度を落としていく。

目的地に着いたのだと、雫は周囲の空気の変化から何となく悟る。

「開門！ レオン陛下がお戻りである！ 開門せよ！」

夜気を切り裂くイシュトバーンの叫びに、雫は華奢な両肩をビクリと小さく震わせる。

思わず視線をそちらに向けると、白亜の巨大な城が視界を埋めた。

「わ、綺麗。ポストカードみたい」

雫には目に映る全てが現実感に乏しく、遠い異国での出来事をモニター越しに見ている感覚が拭えない。

それでも不思議と違和感はありません、今現在置かれている状況

を自然に受け入れてしまっている自分が確かにいるのが不思議だった。

さっきのうたた寝で夢を視てから、確実に何かが変わった。
夢の内容を全く覚えていないのがもどかしい。

「ポストカード？ それは一体何です？ ブラン城に何か関連がある？」

「あ、違います。ブラン城に関連があるんじゃないで、ポストカードなんかでよく見る風景に似てるなって思ったんです。あ、ポストカードって言うのは――」

公爵の右手が動き、雫の口唇に、彼の骨太でありながらも繊細さを残す人差し指がそつと置かれた。

「いえ、やはりそれはまた後程お聞かせ願えますか？ 顔色があまり宜しくない。記憶も多少混濁なさっているようだ。今暫くは、お静かになさっていてください」

コバルトブルーの瞳が限りなく甘い。
雫はその視線に耐え切れずに、さりげなく視線を反らす。

白い石造りの尖塔が、見える範囲だけで大小合わせて五つ、夜空に向けてそびえ立っている。

視線をあちこちに巡らせながら下に降ろしてくると、見張り台上にいる銀の甲冑姿の騎士が、城壁の内側に向かって合図をしているのが見えた。

「開門！」

重厚な音を響かせ、鉄で補強された巨大な木製の両開きの扉が、ゆっくりと左右に開いていくと、数人の人影が隊列を成して佇んでいるのが見えた。

先頭に立つのは、隊列の中でもやや小柄で華奢な少年だった。綿毛の様にふわりとしたベビーブロンドに、煌めくエメラルドグリーンの瞳。天使に見紛う程の美貌の持ち主だ。

そのあまりにも優美な所作、そして麗しき姿に、雫は思わず視線を奪われた。

綿密な飾り刺繍が施されたショート丈のジャケット、膝までのパンツにタイツ。襟元から前身頃をフリルで飾ったブラウスを合わせた中性的な装いが良く似合っている。

全身を白で固める中、唯一髪の色に合わせた金砂のサッシュを腰に巻き、帯刀している姿は凜として実に様になっていた。

「ぼくに執務を全て押し付けて、ようやくお帰りかい？ レオン。この政情不安の折、そんな軽装で城外に出るなんて。きみには国主

たる自覚がまだまだ足りないようだね」

「当たるはずのない敵の攻撃を怖れてどうする」

「暫く大人しくなるように、その根拠のない自信を切り刻んであげようか？」

「わたしが玉座の上に落ち着くのは、トランシルヴァニアの独立を周辺国に認めさせてからだ。国境近辺で何か異変があれば確認するのは当然だろう？」

「斥候を出せば済む話だね。この国がまだ未熟なのは同意する。内政に外政、国としての体裁を整える為には、やらなければならない事がたくさんある。それにはまず、自らが大人にならなければならないんじゃないのか？」

何時までも前線に立っているようじゃダメだし、力だけのごり押しでは国は纏まらないと知って欲しいね。

何の為にイシュトバーンや、ぼくがいる？」

天使の微笑みを湛えながら、率直かつ辛辣な言葉を吐き続ける少年は才気に満ち溢れている。

早熟なのか見た目程には幼くないのか、その外見とのあまりの落差に、雫は思わず目を瞠る。

「いい加減、小言はそれくらいにしろ。女神の御前だ」

「神であろうが悪魔であろうが、そんなの関係ないね。確かに神気は凄いけど、同等の魔力を持つばくの目には、ただの小娘にしか見えない」

「ね！ 名前、教えて？」

雫が思わず声を上げると、天使は不快感も顕わに眉を顰^{ひそ}めた。

「……会話の途中で、いきなり割り込んで来て欲しくないね。場の空気を読めない奴は嫌いだ」

「あ、ごめんなさいっ。でもどうしても、あなたの名前が知りたかったの」

——わたしを特別扱いしない、初めての人だから。

雫が馬上からじっと少年の瞳を見つめていると、さりげなく視線を外されてしまう。

だが、その目許には微かに朱が走っている。

「ジョルジュだ。ジョルジュ」スタインバーグ。この国の宰相だが、形だけの敬称なんてどうでもいい。ジョルジュと呼んで欲しいね」

「わたしは星^{アストライア}。雫と呼んで」

「ならアストライア、そんな水に濡れたままでどうしたんだ？ 何故、定理を使わない？ いや、それより大の男が雁首揃えて、全く気が利かない。待ってる、今乾かしてやる」

二人が交わした言葉に場が一瞬ざわめいたが、定理と聞いて脳裏に数式が駆け巡っていた雫がそれに気付く事はなかった。

「っ！？」 術式が走査しない？ ユーリイ！ 解析 しろっ、定理が全く通じない」

ジョルジュの驚愕を含んだ声に、雫が我を取り戻すと、彼の左斜め後方にいた軍服に身を包んだ護衛とおぼしき女性が、何ら動じる様子もなく機械的に答える。

「城門が開いてから既に 解析 を試みてはいるのですが、アストライア様に対する術式が全て消去されてしまいます。いえ、最初から発動しないと言った方が宜しいかもしれません」

「――結界か」

「はい。我々にとって未知なる概念の結界なのでしょう。公開されている既存の術式なら、わたしは全てを記憶していますがゆえに」

「未知なる結界だと？　となれば　解除　するのは無理なのか？」

「絶対に。とは言い切れませんが、現時点ではそう捉えて頂いて構いません」

呻くようなジョルジュの言葉に、ユーリイと呼ばれた女性は無表情のまま、さらに追い討ちをかけるようにしてそう言った。

彼女はハニーブラウンの髪をざっくりとラフに編み込み、左肩から前方に向けて垂らしている。

瞳は髪と同色で、端正でありながら表情と姿勢を一切崩す事のないその佇まいは、著名な古代彫刻に通じる美しさがあった。

「誰と誰の力が同等だった？　これで分かったか、ジョルジュ、己の不敬を？　アストライア様御本人には、いかなる定理の術式も走査しない。解を導けないのだ。それでもなければ、むざむざと発熱させてしまう事もなかった。可及的速やかに星霜の間に御案内し、着替えを召された後、暖を取って頂かなくては」

「レオン、そういう事は早く言え。肺炎にでもさせてしまったらどうするつもりだ。それにしてもアストライア、結界を張るのはまだ

いい。だが、何故自ら定理を使わない？」

ジョルジュの二度目の問いに、雫は戸惑いを隠せなかった。

「定理って？ えっと、何。ピタゴラス？」

雫の言葉に表情を歪めたジョルジュが、未だ馬上のレオンに向けて言い募るうと、一歩踏み出したその時だった。

一面の飾り扇子が、雪のようにはらりと空から降って来た。

場にいる全員の視線が上空に向けられると、最上階南側の一角にある大きな窓に色鮮やかな人影が映っているのが、誰の目にも見て取れた。

「——緋の姫君」

場にふと漏らされた誰かの眩き。その響きに、多大なる畏敬の念が含まれているのは、雫の耳にも疑いようがなかった。

やがて滑るようにして、飾り扇子が石畳の上に柔らかく舞い降りると、開かれた面の上に緋色のリングが浮かび上がり、宙に舞った。

『何時まで妾を待たせるつもりじゃ。空気の読めぬ（……………）輩は嫌われるのである？』

定理のリングが再生した声を聞くと同時に、レオン以外の騎士は一斉に馬から降りて、手綱を引いた状態で礼を執る。

ジオルジュとその護衛たちも背後の城に向き直り、騎士たちの後に続く。

その光景を見下ろし、満足したかのように艶やかな笑みを一つ浮かべると、緋の姫君は窓辺から消えた。

辺りは水を打ったように静まり返っていたが、ようやくにしてレオンが苦々しげに呻き声を漏らす。

「侍女長は何をしている？ あの部屋の位置は、確か——」

レオンの誰に向けたものでもない問いに、ジオルジュはゆっくり

と振り返ると、表情も固く形の良い口唇をわずかに歪めた。

「——そう、
“星霜の間”だ」

2・2プラン城星霜の間（後書き）

毎回読んでくださっている方、お気に入り登録してくださっている方。

どちらも本当にありがとうございます。

今後も御期待に沿えるよう、頑張ります。

2・3ブラン城星霜の間

——さっきのあれは何？ 扇子が喋ったよね？

雫は混乱していた。

さっき見た光景が何度も脳裏でリピートする。

舞い降りた飾り扇子の開かれた面に緋色のリングが浮かび上がり、宙に舞ったあのシーン。

周囲の人間の言葉の断片を寄せ集めて推測するに、あれが定理と呼ばれるものらしい。

世界の理を術式で導き顕現する力。

——何て、ファンタジックな現象なの？

ジョルジュはあの能力を自分にも使えと言った。

定理を使えば、濡れた軀を乾かすなんて簡単な事らしい。

——そんなの無理だし！ 女神とか定理とかこの世界は何、地球ですらないの？

だが雫には、トランシルヴァニアという国名に覚えがある。
以前嵌まったファンタジーのコミックスの舞台が、確かトランシル
ヴァニア公国だった。

記憶に間違いがなければ、中世の東欧に実在した小国の名のはず
だ。

吸血鬼とか人狼伝説の発祥の地として、世界的にも知られている
土地らしい。

——この世界はわたしがいた世界とちよつと違うみたいだから、
もしかして吸血鬼や人狼とかも実際にいたりする？ わたし、女神
に間違われてるんだよね。それって不味くない？ 狙われたりしち
やったらどうしよう。十字架が嫌いって事は、神様を敵視してるん
だよな。

トランシルヴァニア公の腕に抱かれ、雫は一人思索の淵に沈んだ。
ブラン城という名にも覚えがある。城主は時代と共に変遷するが、
その中の一人、ヴラドⅡツェペシュはドラキュラ伯爵のモデルだっ
たはずだ。

——とりあえずツェペシュさんって名前の人がいたら、逆らわず
に大人しくしていた方がいいよね！

絶対的に足りなかった情報の断片が徐々に手許に揃い始め、手持ちの知識と結び付く。

発熱によって鈍く、そして重くなった思考の歯車が、ようやく回りだす。

だがそれでも足りない欠片^{ピース}が多すぎて、完成図の予想がつかないジグソーパズルを組んでいるかのような、何処か満たされる事のない徒労感^{もどかしさ}があった。

尖塔内部の螺旋階段を登り切ると、先導を務めていた隊が立ち止まり、最後尾中央にいたジョルジュが振り返った。トランシルヴァニア公にさりげなく目配せをした後、雫の視線を捉えたと徐に口を開いた。^{おもむろ}

「アストライア、先にこれだけは言っておく。

おそらくは、今から星霜の間で緋の姫君と対面する事になるが、何があっても動じるな。余計な事は話さず、口は閉じている。ぼくとレオンに全てを任せるんだ。決して悪いようにはしない」

「あのっ……緋の姫君の御名前は？」

「ローゼ「ツエペシュだ」

「―――」

「それより、いいな。ぼくの言葉通りに振る舞えるか？」

半ば予想していた通りの答えに軽い目眩を覚えながら、雫は小さく息を呑むと目尻に涙を浮かべ、コクコクとただ何度も頷く事しかできなかった。

「ツエペシユの家名を御存知ですか？　そう怯える事はありません。わたしがあなたをこうして胸の内に抱きしめている限り、誰であろうと御身に仇なすような事はさせません」

柔らかな言葉で慰撫しながら、トランシルヴァニア公は右手親指で雫の涙をそっと拭う。

だがそれで雫の心が直ぐに癒される事はなく、続くジョルジュの言葉を聞いてはさらに、限りなく絶望的な気分^{まればと}に陥った。

「レオンはヴァンパイアの姫君の寵愛を得る稀人だからその点は安心していい。かの姫君もレオンだけには何故か甘いからな」

それを聞いた雫は速やかに一人で歩く意思を伝え、レオンに抱き上げられている軀を降ろすようお願いが出たが、そのささやかでありながらも切実なる願いが叶えられる事はなく、彼女は発熱した我が身をただ呪うしかなかった。

悪夢はまだ、始まったばかり――。

2・3プラン城星霜の間（後書き）

世界観の提示がだいぶ為されて来たと思います。ジワジワ盛り上げていきますね。

毎回のご訪問とお気に入り登録ありがとうございます。

今後もよろしく願います。

2 - 4 ブラン城星霜の間

最上階の通路は、美術館にも似た静謐な雰囲気醸し出していた。採光の為に穿たれている外壁側の天井近くにあるスリットから、柔らかな月灯りが射し込んでいる。

更に壁の両側足許の高さに設置されている、銅製の燭台に刻み込まれた彫金による定理のリングが、一行が間近に差し掛かると即座に反応して、間接照明風に通路を照らし出す。

——すごい、これも定理の力？ リング内のあの文字は呪文みたいなもの？

その光景を目の当たりにして、雫の混乱はさらに増す。

やがて通路の最も奥に辿り着くと、一際豪華な木製の扉があった。おそらくは国の紋章である細やかな浮き彫り（レリーフ）が施されたその扉の両脇には、背の高い侍女が二人立っている。

さらに、彼女たちに対峙するかのように佇む同じ制服姿のやや小柄な侍女が数名。

黒い膝丈のワンピースドレスに同色のタイツと革靴。レースとフリルがたつぷりの白いヘッドドレスとエプロンを合わせた彼女たちの姿は、現代的な日本人である雫の感覚ではとても愛らしく思えるが、向かい合った両者の間に漂うのは一触即発の緊迫した重い空気だった。

「侍女長はいるか？ いたら返事しろ、シエロ＝ティルリア！ これは一体どういう訳だ。こんな場所で何をやってる」

「ジョルジュ様！」

ジョルジュが睨み合う侍女たちの集団に割って入ると、制服とは装いの違う黒のロングワンピース姿の女性が振り返り、ホツとしたような安堵の表情を浮かべた。

だが、それも束の間。彼女はトランシルヴァニア公レオンの姿を認めると、再びその身を固くして他の侍女たちと共に腰を深く折る。

「申し訳ありません、陛下。うけたまわ承あこがった御託ごたけを果たす事叶わず……」

「シエロ、何も言わずとも事情は分かっている。すまなかったな。後は我々に任せてもう下がっていい」

「ですが、このままでは……！　せめて陛下御入室の前に室内の検分を」

綺麗に結い上げられたブラウニッシュシュブロンドが弾かれたように跳ねた。

シエロはレオンに真っ直ぐな眼差しを向け、自身のやるせない気

持ちを瞳で訴える。

その遣り取りに、扉の両脇に立つ背の高い侍女二人が過敏に反応した。

「お待ちください」

「聞き捨てなりませぬな、侍女長」

「ローゼ様の御側仕え我ら十三名」

「その手になる貴賓の間の下拵えを」

「信頼できぬと申されますか」

「それは、我らに信を置いてくださっている主^{あるじ}」

「ローゼ様に対する不敬と見倣^{みな}してもよろしいか」

矢継ぎ早に息のあったタイミングで交互に言葉を重ねて、シエロに詰め寄る二人――だが。

「そこまですておきなさい二人とも。姫様の御前で畏れ多い」

二人の侍女たちの背後の扉が音もなく開くと、中から現れた侍女が彼女たちを諷めた。

その口調は淡々としてはいるが、誰にも有無を言わせない凜とした響きがある。

オフシディアン

黒曜石のストレートボブと瞳を持った長身スレンダーなモデル体型、新たに現れたその侍女は二人を室内に下がらせると、自らは腰を深く折って礼の姿勢を執る。

「申し訳ありませんでした。姫様がお待ちでございます、どうぞお入りください。お集まり頂いた他の侍女の方々もよろしければ中へ

――

扉の奥には、緋の姫君の側仕えたちが六名ずつ向かい合わせに立ち、列を成している。

その中央を先導する黒の侍女に続いて、一行はようやく室内に招き入れられた。

星霜の間と呼ばれるその部屋は、石が積まれた白亜の壁が剥き出しで、贅を凝らした派手さはないが、絵画や家具などの調度品類でセンスよく纏められていて雫の好みに合っていた。

―― 教室を横に二つ並べた位の大きさかなー。

興味津々で室内のあちこちを見廻す雫の視界に、色鮮やかな緋の色が映った。

「待ちかねたぞ、皆。さ、近う寄れ」

血に染まったかのような紅い髪とドレスを身に纏った緋の姫君は、窓際に置かれたカウチ風のローソファに深く身を沈め、口許を扇子で隠したままそう言った。

彼女は肘掛けに左の肘を軽く置き、深紅色のドレスのスリットから覗く白い脚はすなりと長く伸びて綺麗に揃えられている。

肖像画のように完成されたその佇まいに、雫は思わず溜息を漏らした。

ただ、ただ――、緋の姫君の艶やかさに見とれるばかりでいた雫は、だから“それ”に気付くのが遅れた。

再び場に張り詰めていく緊張の糸に。

最初に違和感を覚えたのは、レオンのすぐ間近、後ろに控えていたジオルジュの小さな舌打ちだった。

誰もが聞き逃してしまいそうなほんの小さな音だったが、雫の耳にはやけにはつきりとそれが届いた。

強烈な違和感。

何故これ程の違和感を覚えるのか、雫が考える間もなく、ジオルジュは緋の姫君の側近くにまで歩み寄っていく。

「待て、ジヨルジュっ」

レオンのやや焦りを含んだ言葉は聞こえる事がなかったのか、ジヨルジュは緋の姫君の足許に跪くと、左手を恭しく取って騎士の誓いのくちづけを落とす。

『ローゼ様、皆の目があります。正妃とも言えども陛下の御前では御起立を願います』

『正妃ではない。妾はまだ婚約中の身なれば』

『だったら尚更です。これでは国は纏まらない。現にあなたの御側仕えは、誰一人として陛下に頭を下げない。他の者に示しがつかないとは思いませんか』

人の耳を憚^{ははか}りながら小声で交わされる二人のやりとりに、ソファの後ろで控えていた黒の侍女が色をなして口を差し挟む。

「ジヨルジュ様、姫様に対して御言葉が過ぎますぞ。お二方の格を

考えれば、むしろ膝を折るべきは――」

「黙れっ、おまえたちのその態度が目には余ると言ってるんだ」

「そうじゃな、控えよディアナ」

「では――！」

緋の姫君の窘めるかのような言葉に、ジョルジュの声音が和らぎ、態度が軟化する。

「時に、ジョルジュ。おまえは近隣の国々にはレオンと並び、少しは名の知れた騎士らしいの。戦に出ていた頃は戦場で遅れを取った事はないそうじゃな？」

「それが、今何か？」

「いや何、妾の眼から見ればまだまだ隙だらけじゃと思つてな」

結論から言えば、ジョルジュに罪はない。

彼に後手を踏ませた相手の卓越したその技量をこそ称賛すべきであり、彼に剣の柄を押さえる暇さえ与える事のなかったその反応速度にただ驚嘆すべきだった。

「ディアナよ、思い上がった坊やの躰は妾がする。事が済むまで黙して見ているがよい」

緋の姫君ローゼツェペシュは、そう言い終えるや否やジョルジュの剣を鞘からスラリと抜き放つ。

「――！」

完全に虚を衝かれ、剣を奪われた事を知ったジョルジュはただ屈辱に塗れ、口唇を噛む以外に為す術もなかった。

2・4プラン城星霜の間（後書き）

お待たせしました。

いつもご訪問くださる方、新たに気に入登録してくださった方、ありがとうございます。

3 - 1 緋の姫君

ローゼの口許を隠していた下ろし立ての飾り扇子が、ぱたりと閉じて消えた次の瞬間、彼女の手中にジョルジュの剣が魔法のように不意に出現した。

顕わになった彼女の口唇は血の色に染められたかのような妖艶さで、凶悪な微笑を湛えていく。

『そうじゃな、控えよディアナ』

『では——！』

叱責覚悟の進言が受け入れられなければ、ジョルジュはどのような咎も甘んじて受け入れる気でいた。

だからローゼがジョルジュの言葉を受け入れ、退いたかのように見えたその一瞬、彼の精神は僅かに弛んだ。

それは自覚すらする事のできない、無意識レベルでの微少な隙。

その一点を見逃す事なく衝いたローゼの手練手管の巧みさに、ジョルジュはただ口唇を噛むしか為す術がない。

凶刃と化した己の剣が自らに降り下ろされる一瞬を、息を呑んで待つばかりだった。

「妾を弾劾する口実を作る為、国の礎になるつもりか、ジョルジュ。」

不遜だが面白い。だが宰相ごときの命では、到底釣り合いが取れぬである」

にいい——つと、ローゼの口角が凶悪な角度に吊り上がっていくのを間近に見て、ジオルジュの背筋に戦慄が走る。

「!? レオ——っ」

ジオルジュがレオンを振り返えると、ローゼの手から放たれた剣の切尖が空気を切り裂き、レオンの胸に吸い込まれていく軌跡がその瞳に映った。

レオンの胸には恐怖に引き攣る^{アストライア}雫が抱かれ、納まっている。

室内にいる誰もが何の反応もできなかった——否、ただ一人を除いては。

左腕は雫を強く抱き締めたまま、レオンの右腕が残像すら残さず、神速の動きで剣を鞘から抜きざまに風呂払う。

だが、ローゼの放った剣がレオンに届く事はなかった。

部屋中の至る所に舞う定理のリングから放たれた、無数の攻撃的術式の解がローゼの剣を迎撃、これを消滅させた。

「くう——っ!」

だが残された流れ弾が次に矛先を向けその標的とするのは、射線上にいるレオンと雫であるのが必然。狂暴な牙を剥いて、全方位から二人に向けて一斉に襲いかかる。

レオンは返す剣の斬撃で攻撃的術式の解をいくつか切断したが、とてもではないが全てに対応できるはずもなく、絶望の苦鳴を思わず漏らす。

「数がつ、多すぎる!!」

それが合図だったかのように、二重螺旋のリングが無数に乱舞した。

火、水、土、雷、そして風。

同時に、全ての攻撃的術式の解が一瞬で四散する。静寂の空間。誰もが言葉を失っている。咳一つ聞こえない室内に雫の声が響き渡った。

「……お兄ちゃんは、わたしが護るわ」

啞然とするレオンの腕の中、銀色の瞳に蒼銀の髪を仄かに光らせ、雫が凜と言い放った。

だが、彼女はそれを最後に再び意識を手放し、糸の切れた操り人形のようにレオンの腕の中で崩れ落ちてしまう。^{ネット}
^{マリオ}

「シズク（・・・）が落ちる！ 貸せっ、妾が抱く。危なっかしくて見ておれん」

いつの間にソファから立ち上がっていたのか、気付けばレオンの側近くにいたローゼが、奪うようにして雫の軀を腕の中に納めて抱き締める。

「——姫様？」

誰^は憚^ばる事なく雫を慈しむローゼの様子に、ディアナがぼつりと漏らした戸惑いの呟きを、ジオルジュは複雑な想いを胸中に抱きつつ、耳にしていた。

3 - 1 緋の姫君（後書き）

ああつ、百合作家の血が騒いで困ります。

逆ハ―展開のフラグも立てつつ、零争奪戦がいよいよ始まります。
ここまで来るのに、長かった・・・。

いつもご訪問してくださる方、お気に入り登録してくださってる
方、冬季休暇で初めてお越しの方、全ての皆様方に感謝の気持ちで。

3 - 2 緋の姫君

時は、十五世紀初頭――。

公的には“ワラキア公国自治領トランシルヴァニア”と呼ばれるその地域は、東欧に位置する未だ独立国家として認知される事のない新興の小国である。

北に東ハンガリー王国、南にワラキア公国という強国と隣接し、東からはオスマントルコ帝国、西からは神聖ローマ帝国という二大侵略国家の脅威に常に晒されている。

ブラン城は位置的にも戦略的にも、権勢拡大を狙う各勢力がせめぎ合う最前線にある。

無血革命による未だ混乱の醒めやらぬ城内には敵国の間諜が多数入り込み、隙あらば内乱を誘発し動乱制圧の為に派遣された義勇軍として大義名分を獲得しつつ、双方最小限の被害に抑えながら自国の手勢をトランシルヴァニアの中枢にまで一気に引き込むべく策謀を巡らしている。

それは皮肉にも、レオンとジョルジュがブラン城を陥落させたのと全く同様の手法でもあり、正面からの攻城戦による無駄な消耗を避ける為の常套手段として、選択肢の最後に必ず残る作戦でもあった。

敵味方が入り乱れる混沌としたその状況は、誰かが誰かに無条件で心を許せば即座に寝首を掻かれる怖れが常に付き纏う。

それは戦場と何ら変わらぬ緊張を強いる、他者への疑念渦巻く極限的閉鎖空間だった。

「見たか、これが神域の力じゃ。定理を超えた定理、まさに伝承どおりの術式。この世の因果律を司る、神属ならではの理^{ことわり}。同時にあれだけの数の術式を走らせるなど、完全にこの世の理^{ことわり}を超えている——さて、ディアナ」

「は。姫様」

レオンから雫を奪い取ったローゼは、再びソファアに戻って腰を下ろすと、侍女の一人にブランケットを用意するよう指示を与える。

「あの刹那の折り、シズクは幾つ環^{リング}を開いたかの？」

「発動した攻撃的術式の総数よりジョルジュ様の剣に命中した残数、一？四九。その内訳は、火が三一九、水が二六三、土一六一、雷が二八七、風が十九でございます」

「レオンが剣で両断した分を差し引いても、千にも上る数という訳か。まさに一騎当千じゃな。いかに神属といえど、何故にそのよう^{なにゆえ}な事が可能であるか、分かるか？」

ローゼは、侍女が用意したブランケットで雫の軀を包むと、自らの膝枕を彼女に与えソファに横たえさせた。

やがて、おもむろに乱れた蒼銀の髪に手を伸ばすと、そつと指で梳^すき始める。

「アストライア様は――」

「違う!」

「シつ、シズク様は――」

間髪入れず飛んだローゼの厳しい叱責に、ディアナは内なる動揺を隠しきる事ができなかったが、続く言葉の冷やかさには、さらにその身を竦^{すく}ませるしかなかった。

「二度も言わせるな。今後はシズクの名で呼ぶよう命じたはずじゃ」

「は、仰せのままに」

ディアナの返事に満足そうに頷くと、ローゼは室内をゆっくりと見渡す。

「皆もよいか？　その方がシズクも喜ぶ」

それまで二人の会話に取り残されていた人間たちの中で、最も焦っていた者がそこでたまらず声を上げた。

ジョルジュである。

彼は、自らはソファ―に腰を落ち着けながらも、国主であるレオンにすら席を勧める素振りも見せないローゼの尊大さに対して、内心ではかなりの憤りを覚えていた。

「ローゼ様、その名は一体何処から？　それがアストライアの真名なのでしょうか？」

「真名？　ま、ある意味そうであるとも言えるし、そうでないとも言えるな」

噛み付かんばかりの表情で詰め寄るジョルジュを、ローゼは軽くない。

ますますいきり立つジョルジュに、見かねたレオンが会話を繋いだ。

「そう呼んだ方がシズク様が喜ぶのであれば、異存はありませぬ。それよりも我が婚約者殿、シズク様に一刻も早く湯浴みと着替えを」

「今、シエロ達も交えて湯殿と寝室周りを急ぎ仕度させている。それまではこのまま寝かせてやるがよい。見よ、この安らかな寝顔を。実に美しい」

「シズクは湖にて全身ずぶ濡れとなり軀が冷えきっている、このままでは肺炎になる怖れが――」

冷静さをやや取り戻したジオルジュの言葉に、ローゼはいかにも耐えきれずといった様子で小さく吹き出す。

「これは異な事を申す。シズクはこのように安息の状態であると言うのに、そなた達の目は節穴か」

ローゼの悪戯っぱさを含んだ口調に、ジオルジュは訝しげな視線を雫に向けると、その双眸を見開いた。湖水をたつぷり含んで濡れていたはずの蒼銀の髪や、ブランケットから覗き見える衣装は、完全に乾いた状態だったからだ。

雫の蒼白だった頬には僅かに朱が差し、紫がかった口唇にも艶やかさが戻っている。

その可憐な口唇から漏れる吐息は穏やかで規則正しく、彼女の胸はゆったりと上下していた。

「――…乾いてる。湿ってさえないない。それどころか、完全に血色が戻っている」

「そんな！？　一体いつの間に、どうやって？」

ジョルジュが茫然と漏らした言葉に、ユーリイが過剰に反応し、声を上げる。

「ディアナ、先程の続きを――」

ローゼはちらりとユーリイに対して一瞥をくれただけで、それ以上は特に関心を示す事もなく、ディアナに向かって途切れた会話の続きを促す。

「……シズク様は、御自身の軀の周囲に不可視の術式を常時展開なさっています。その結界内に侵入するいかなる攻撃的術式にも反応これを消滅せしめているのは間違いありません。ですが、その術式構成・運用法はいかなるものか、その限界が何処いすこにあるのか、わたしには伺い知る事すら叶いません」

「ふむ。やはりその辺りが限界か。では、そうじゃな。つい先刻の言葉ではあまり期待はできぬが、次はユーリイに問おう。

そなたにならシズクの術式の構成が解けるか？ 間近であれだけの数の神域の発動を見たのじゃ。辞書ディクショナリーと呼ばれる力、見せてみよ」

ライブラリー
「図書館です、姫様」

ローゼの背後からディアナが、感情の抑揚を抑えた声でやんわりと訂正するが、彼女の主人はそれでも全く悪びれる様子も見せず、小さく顎を上げて鼻を鳴らす。

「アカシックレコードの前ではどちらも塵芥ちりあくたにすぎぬ。大した違いはないである」

「以前よりお尋ねしたかったです……。ローゼ様はやはり、アカシックレコードへの接触アクセスを許された“認証持ち”コード なのですか？ 実はもう、全てを御理解なさっているのでは？」

ともすれば挑発とも取れる言葉に、固く頬を強張らせていたユーリイが問い返すと、何処かからかうような響きを含んだ声で、ローゼが答える。

「ほう、アカシックレコードを知っておるか？」

そう気安く使えるものではないがな。消耗が激しすぎる。

神属のように、未来方向からの情報を入手するのも妾には無理じゃ。もっぱら過去方向へのみの接触しか許されてはおらぬ。もつともそれは絶対的な“容量”の差でもあるが」

「容量？」

「誰でも一度に欲しい情報の全てを入手できる程、便利なものではないという事じゃ。さ、そういう訳で妾も少々疲れておる。続きがあるなら早々に答えよ」

けだるげにソファアの背もたれに身を預け、肘掛けに左肘でしなだれかかるような仕草でもたれると、眉間にうつすらと皺を寄せ、思わせぶりに小さな溜息を漏らす。

その仕草は実に優美で、いちいち芝居がかってはいるが、決して嫌みに見せる事はない。

ユーリイはもし許されるなら、さらにアカシックレコードについての質問を重ねる心積もりでいたが、ローゼの態度がそれを拒絶しているのを知ると、それ以上の追求をあっさり諦め、気持ちを切り替えた。

とてもではないが、生半可な無理強いや駆け引きが利くような相手ではない。今では切れ者の宰相として、他国にまで知られるジョルジュでさえ子供扱いされるのだ。

「畏れながら……。二重螺旋の環に謎を解く鍵があるのであるうと
しか。」

あのような神域^{ていり}は初めて見ましたゆえ、わたしの知識に該当もし
くは類似するものではなく。さらには、術式を構成しているのが未
知なる文字・言語体系であれば、解析の糸口すら掴めず――」

「では質問を変えよう。個別に開かれた二重螺旋の環^{リング}がほんの一瞬
の間、可視状態となつたのは？」

「シズク様の術式と皆様方がこの部屋の至る処に仕掛けられた攻撃
的術式が、相互に作用した結果であると思われます。一方で癒し系
などの補助的術式には、あれ程劇的な反応は示さないようです。ジ
ョルジュ様の時がそうでした」

「それはつまり？」

「本来ならそれは自らに向けられる、敵意・殺意の排除が主目的で
あると思われます」

ローゼは再び何処から取り出した飾り扇子を口許で広げると、
欠伸が漏れるのを隠した。

「――じれったいの。解析にも満たない考察程度じゃが、まあいい。
他には何かあるか？」

「剣に対しては、反応する気配すらありませんでした。おそらく武器・武具全般においても同様でしょう。」

現在シズク様は記憶に混乱が見られ、御自由に神域を使いこなす事できぬ御様子。術式の他に護身の術すべがなければ、かなり危険な状態にあると言えます」

それまで押し黙っていたジョルジュが、二人の会話に割り込んだ。

「なるほど、だから星霜の間を定理による要塞と化したのですね。誰を護衛に付けても不安という事か。悪意のある存在なら、魔力を持たない者でも簡単にシズクを拉致できるし、その気になれば命すら奪えてしまう」

「ふむ、ようやくそこまで辿り着いたか。待ちかねたぞ。まだ材料は出揃ってはおらぬが、解る範囲でよい。ジョルジュ、その先を申ししてみよ」

ローゼは扇子をぱちりと音を立て閉じると、ジョルジュに向けてそれを振るった。

「貴女はシズクをいたくお気に召したようですね。それも、彼女をひとときも手放したくない程に。」

さっきの芝居がかった茶番は、シズクには一切手を出すなという警告だった訳です。出しても無駄だと知らしめる為の。それも当然、この城には他国の間諜が多数入り込んでいる」

「神域の術式構成を解析できれば、膠着した戦局を一気に打開できるからの。無論、シズク自身戦力としても申し分ない。だが、対術式に於いては無敵だが武器の類いにはまるで無力。

手に入れる事ができぬのなら、暗殺に切り替えてくる怖れもある。そうなれば我が国にとって大いなる痛手。国内にて至高の神を失えば、この大陸全てをも敵に回しかねぬ両刃の剣。

今のシズクは謂わば、最強でありながら最弱。

誰よりも強き存在であるのにも関わらず、庇護すべき稀有な存在という訳じゃ」

ローゼの言葉をさらりと継いだ、レオンの次の発言が問題だった。室内の空気が一気に冷え、翳りを帯びる。

「何より、この世の物と思えぬ程美しく、魅力的だ」

それを聞いたローゼが、妖艶なその紅く濡れた口唇から、異様に発達した犬歯を剥き出しに覗かせ嘲笑う。

「坊ううや。女が欲しくば妾が相手をしてやろう。だがシズクはダメじゃ。他の誰にもやらぬ」

室内が険悪な雰囲気へと一気に傾いていくのを救ったのは、寝室の扉口に現れたシエロだった。

「ローゼ様、湯浴みと寝台の仕度が整いましてございます」

頷きをひとつ返して、ローゼはシズクを抱き上げソファから立ち上がる。

「よいか！ これより女神シズクの身柄は、このローゼ「ツエペシュ」が預かる。女神に仇為いずこす者は何処いずこの誰であれ、ツエペシュ一族をも敵に回すと知れ」

その迫力に、思わず誰もが息を呑み言葉を失う。

「ではディアナ、後は頼む」

ローゼは最後に宣戦布告とも取れる、その何者にも有無をも言わ
せぬ言葉の響きを残して踵^{きびす}を返すと、雫と二人寝室へと消えていっ
た。

3 - 2 緋の姫君（後書き）

いつもご訪問してくださり、ありがとうございます。

お気に入り登録、励みになります。

読んでくださる全ての皆様に、多大なる感謝の気持ちを。

緋の姫君ローゼに手を焼いています。後から出てきたのに自己主張が激しくて、どんどん勝手に発言するし、動き回るし、自由気ままで作者のコントロールからも逸脱気味です。

でも本筋から外れなければ、このまま行こうと思っています。キャラが勝手に動いてくれるようになると、物語が生きてくると思うので。

ローゼ、今ではすっかり作者のお気に入りキャラです。

幕間1それぞれの夜

本来の設計思想が、堅牢な要塞である事に主眼を置いたプラン城の建築様式は、十四世紀にイタリアから興ったルネサンス運動の影響からは、地理的にも思想的にも外れた位置にある。

暗黒時代と一括りにされ、欧州で一度は棄て去られたゴシック様式があえて採用されている城の意匠は、華美に過ぎる事のない古典主義が反映され、ローゼはその荘厳な雰囲気や殊の外愛していた。それは貴人や要人の為に用意されている各居室でも同様であり、完全なプライベート空間である寝室ではさらにその傾向が強くなる。普段のローゼが最も落ち着き、くつろげる場所であるが故に、彼女の気力もそこで途切れ、限界を迎えてしまう。

扉口を挟んで立っていた側仕えの侍女二人が寝室の扉を閉じ、居間からの視界が遮られるのを待って、ローゼの軀は膝から崩れ落ちた。

「姫様っ！」

寝台の置かれた窓側とは反対の壁際に整列していた侍女達が、慌ててローゼの傍らに駆け寄り、主人の傾きかけた軀を支える。

ローゼは意識を失ったままの雪の身を名残惜しげに侍女達に預けると、周囲に対して不自然さを微塵も感じさせる事なく気丈に振る舞う。

「静まれ……、アカシックレコードへの接触で魔力を少々持ってい
かれただけじゃ。星霜の間にいる者たちに気取られてはならぬ。妾
の事はよいから、シズクの世話を優先して疎かにするな」

「今すぐ癒しの術式を」

侍女達の輪の外、一步退いた位置に立っていたシエロが控え目に
声をかけると、ローゼはストロベリーブロンドの巻き毛を無造作に
かきあげ、ゆるりと首を振った。

「構わずともよい。例えこの場にいる者全ての命を賭したとしても、
気休め程度にしかならぬわ。器が違いすぎる」

「では、このまま黙って見ていろとおっしゃるのですか」

「そうじゃ、ただ黙って見ていればよい。」

シエロとその側近の部下達に命じる。本日この瞬間を以て妾の側
仕えに任じる。この場で見た出来事を一切口外せぬと誓えるか？」

常人であれば、身が竦む程に底冷えのするローゼの問いに、シエ
ロは影のない艶やかな微笑を返す。

「これはローゼ様。わざわざたくし共の意思を確かめるまでもないではありませんか。誓わねば、物言わぬ冷たい骸むくろがこの部屋の床に数体並ぶのでございましょう?」

ローゼの深紅の瞳が煌めき、血に濡れたかのような口唇が捲れ上がると、異様に発達した犬歯が剥き出しになる。

「さあて、な。試してみるか?」

ローゼの無慈悲な言葉の響きに臆する事なく、シエロが返事の代わりにその綺麗に編み込まれたブラウニッシュブロンドの頭を深く垂れ、恭順の意思を示すと、彼女の側近の侍女達も無言のままその後続いた。

回廊状に築城されたブラン城の内庭の一角に、鉄柵で囲われたスペースがある。

下弦の月灯りが降るその場所、剣と定理の修練場。 人の気配の

消えた深夜。　白い亡霊の如き影が二つ。

残像から実体、実体から残像へ。

剣と剣を斬り結んでは離れ、離れては斬り結ぶ。

激しく打ち合う剣撃の音が、徐々にその動きからずれていく。

疾風迅雷。音速を超えるその疾さは、人が目視出来る限界から遙かに逸脱していく。

やがてひとときわ激しい金属音と共に火花が散ると、一振りの剣が虚空に弾け飛んだ。

綿毛のようにふわりとしたベビーブロンドに、煌めくエメラルドグリーンの瞳。天使に見紛う程の美貌の少年の剣先が、藍色を含んだ黒髪に頬傷を持った長身の男の喉許に突き付けられていた。

「お見事です、ジョルジュ様。しばらく実戦から離れていたとは思えぬ動き。感服致しました」

「重い装甲を身に付けたまま、息ひとつ乱さずによく言う。だが、これじゃ全然だめなんだ。術式の加護や流れの中で得られる速さでは、緋の姫君みたいな“本物”には勝てない」

けだるげな様子でソファーに腰を降ろしたままの状態から、何の予兆も見せずにいきなりトップギアに入った動きを見せたローゼの剣捌き。

あの無駄のない完成された動きは、ジョルジュにとって衝撃的だった。

あのような相手は、戦場でさえ出会った事はないからだ。

剣の腕にしる、雫の扱いにしる、このままいいようにあしらわれ

たままでは、ジヨルジュの誇り高い矜持が許さなかった。

「剣を拾え、イシュトバーン。当分、ぼくの気がすむまで付き合ってもらうからな」

膨大な蔵書が納められた本棚が幾重にも連なる静謐の空間に、彼女は場違いな軍の制服に身を包んだまま一人佇んでいた。

ハニーブラウンの髪をざっくりとラフに編み込み、左肩から前方に向けて垂らし、髪と同色の瞳は瞬きすら忘れたかのようで、端正でありながら無表情のまま、姿勢を一切崩す事のないその佇まいは、著名な古代彫刻に通じる美しさがあった。

ユーリイはやがておもむろに靴音を響かせると、月灯りだけを頼りに、天井にまで届かんとする背の高い本棚の間をゆっくりと巡回し始める。

右の指先で書物の古ぼけた、それでいて手入れの行き届いている背表紙を次々になぞりながら、別れを惜しむ。

「わたし決めたわ、ローゼ様の御側仕えになる。アカシックレコードの秘密を必ず掴んでみせる」

書物の一冊一冊に、慈愛を込め語りかけていく。

「そして手に入れてみせるわ、ここでは遂に見つける事のできなかつた至高の定理を。シズク様の術式構成の謎を解き、あの御方の術式を行使できれば、闇色の双生児ですら必ず殺せる。遺跡荒らしの盗掘団を束ねる、幼き首領のあの二人を跪かせる事ができる。

翔るようにして壊滅させられたわたしの隊の敵を討ち、部下たちの無念を絶対に晴らしてみせる。

最後は騎士らしく、剣で仕留めてやるから待っている」

言葉のひとつひとつを噛みしめ、自らに言い聞かせるかのように紡いでいく。

高速詠唱による古代の禁術を駆使する姉と、ネクロマンサー複数の術式を一度に走査する妹。マルチリンク

悪夢のような姉妹相手に復讐を果たす。

それが、ユーリイの絶対にして無二の行動原理。

「例えトランシルヴァニアを棄てる事になっても、絶対に捜し出して追い詰めてやる」

扉の前に戻って来たユーリイは室内を振り返る事なく、最後の別れを口にする。

「だから、今夜であなた達とはお別れ。さよなら、もう二度と来ない」

その言葉を残して、彼女は深夜の書庫を後にした。

幕間1それぞれの夜（後書き）

ご訪問ありがとうございます。

毎回毎回書いていますが、皆様方に何時もと変わらぬ感謝の気持ち。

幕間1それぞれの夜は、あと一話幕間2へと続きます。
今しばらくお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1342o/>

おしえて！ 女神さま。

2011年1月16日10時11分発行